

判断形容詞と動詞とが組合わさった 統合型の統合意義特徴の分析

大 滝 幸 子

- 0.0 はじめに
- 1.0 判断形容詞⁽¹⁾の意義素の内部構造に関する総論
- 2.0 分析対象とする言語資料
- 2.1 言語資料の作成方法
 - 【VA 型変換リスト】凡例と【調査Ⅰ】～【調査Ⅳ】の内容——
- 3.0 物体の形状を表す判断形容詞
- 3.1 【V 長形変換リスト】【V 短形変換リスト】
- 3.2 NVA 了型の統合意義特徴および判断形容詞の意義素について、【調査Ⅰ】
が与える情報の検討
- 3.3 一対の形容詞のうち、片方しか使えない NVA 了型についての検討
 - 【用例表Ⅰ】の作成と【NVA 了型統合意義特徴Ⅲ】の検証——
- 3.4 VA 了 N 型の統合意義特徴および判断形容詞の意義素について、【調査Ⅱ】
が与える情報の検討
 - 【VAN 型統合意義特徴】の規定——
- 3.5 VA 了 N 型が「単純な変化結果」を表す用例についての検討
 - 【用例表Ⅱ】の作成と【VA 了 N 型統合意義特徴ⅠⅡ】の規定——
- 3.6 VA 了 N 型が「過分義」を表す用例についての検討
 - 【用例表Ⅱ付表①②】の作成と【VA 了 N 型統合意義特徴Ⅲ】の規定——
- 3.7 NVA 了型が表す「単純な変化結果」と「過分義」

——陸儉明論文と「動作・行為の方向指定」との関連づけ——

3.8 NVA 了型が表す統合意義（その1）

——行為対象格と「動作・行為の方向指定・順逆」との関連付け、および

【NVA 了型統合意義特徴Ⅳ】の規定——

3.9 NVA 了型が表す統合意義（その2）

——生産物格と「動作・行為の方向不特定・順方向」との関連付け——

3.10 A' 地 V 型の統合意義特徴および判断形容詞の意義素について、【調査Ⅳ】が与える情報の検討

3.11 V 得 A' 型の統合意義特徴と VA 了型の「過分義」との共起関係について、【調査Ⅲ】が与える情報の分析

——形状形容詞とスペース形容詞に共通の用法例——

4.0 おわりに

0.0 はじめに

本稿で中国語判断形容詞として扱う判断形容詞は以下の4対、すなわち、“長・短”“粗・細”“厚・薄”“大・小”（一部“高・矮”“高・低”“深・浅”）である。これらはすべて基礎語彙であり、その意味も従来の辞書に書かれている内容に何等つけ加える必要がないように思われがちである。しかし、実際のその用法を比較してみると、それぞれの対の片方しか用いられない用法がいくつも見つけられる。例えば、“伸長了”“去短了”は使い易いが“伸短了”“去长了”は使いにくい。さらに、“剪长了”も同じように使いにくいという語感を与えるが、“剪長点儿”と表現を変えたならばずっと使いやすくなるという。こういう用法のアンバランスが生じるのは何故であろうか？

まず考えられるのは、統合型が単語と単語を組み合わせて文法的関係を成立させる際に、組み合わせを成立させるために必要とする諸条件である文法的意

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

義特徴（「統合意義特徴」と名付ける）が、単語間の語義上の組み合わせと矛盾をきたすことである。その結果、単語の組み合わせが全く成立しない、もしくは成立しにくくなり、後者の場合には文脈・場面からの意味的な条件補充が必要となる、ということである。そして、仮に一对の判断形容詞の語義上の差異が単なる程度の差であったなら、このような複雑な用法のアンバランスは生じないはずである。

本稿は、上記のような4対の判断形容詞と動詞とで構成される統合型の用例をもとに、判断形容詞の意義素を再検討するとともにその統合型の統合意義特徴を分析しようとするものである。

1.0 判断形容詞の意義素の内部構造に関する総論

本稿ではまず、判断形容詞の意義素をより詳しく検討するための方策として、その内部が3種類の意義特徴の束から構成されているものと想定する。この意義特徴の束は、単語形式が表示する意味的な事柄（「意味的事項」⁽²⁾と名付ける）をさまざまな角度から表示するものであり、本稿ではそれらを意識的に見いだすべく努めることにする。

第一の意味的事項は形容詞を述語とした単文において、主語の位置を占める形式、すなわち形容詞に前置される形式に関わるものであり、それにどのような語義的制限を加えるかを定める働きをする意義特徴の束である。本稿ではこれを「判断対象」と名付けることにする。判断対象は「判断形容詞の意義素のなかに含まれながらも、その形容詞以外の形式に依って表されることを前提とする、弁別の特徴⁽³⁾となる意義特徴の束」として捉えなおすことができる。

本稿ではこのような「ある形式の意義素の中に含まれながらも、他の形式の意義素に依って表示される意味的事項」のことを、いわゆる格文法における、動詞の「格」⁽⁴⁾相当の文法形式とする。すなわち本稿では、形容詞にも格の存

在を認める立場をとる⁽⁵⁾。

第二の意味的事項は、判断対象に対して判断を下す方法すなわち「判断方法」とする。判断方法はさらに判断に用いる五感や思考形態についての意義特徴を集めた「判断スケール」と、判断を決定する際に基準とする「判断基準」とに分けて考察するものとする。

日常生活で「高い、大きい、速い」などの判断を下そうとすると、私達は物差しをあてたり、タイムを測ったりしているわけではない。判断の下し方そのもの、つまり判断する際に用いるスケールが何に拠って構成されているかを明らかにするには哲学的論考の蓄積と、心理学や大脳生理学上の実験、そして言語が人間の認識に加える制限についてのデータを揃えて行かなければ、綿密な議論はできないであろう。ただ、判断対象の違いに応じて、①人間に共通して備わっている個別感覚（五感）のどれかが優先的に、判断対象に関するデータ収集にあたること、②五感の機能を統括する共通感覚⁽⁶⁾が、そのデータに対して質的、量的、好感度、などについての判断作業を行うことは、これまでの諸研究を基にして想定してもよいかと考えられる。本稿では、判断対象の意義特徴に応じて、最初のデータ収集を行う感覚が何であるかについて、一定の仮説をたてることにする。

また、普段私達が「高い、大きい、速い」などの判断を下したとき、何を判断基準にしたかについては少なくとも次の四種類の基準が認められよう。①判断対象となる物体の通常の常識的・平均的属性を判断基準としてイメージする（以下「常識基準」と呼ぶ）、②その場面であらまほしき属性を判断基準としてイメージする（以下「適正基準」と呼ぶ）。前者①は形容詞ではなく名詞の意義素内の弁別的特徴の一つに数えられるべき属性であり、後者②は叙述時点ごとに話し手によって設定される文脈意義または場面意義の一種である。さらに③複数の具体的な物体を叙述時点において相互に比較し、その片方を判断基準とする（以下「具体基準」と呼ぶ）。この場合④一方が同一事物の直前または

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

以前の状態であり、もう一方が発話時点での状態であることもある。これを以下「旧態基準」として区別する。何種類かの比較構文や動補構造の意味の違いは、これらの判断基準の違いに平行すると予想される。これらの判断基準が果たす文法的機能は以下、具体例に即して検証していく。

第三の意味的事項は「判断結果」である。上記の判断基準を質量ともに上回ると判断された場合の判断結果を「プラス(+)値」と呼び、質量ともに下回った場合の判断結果を「マイナス(-)値」と呼ぶことにする。また、判断基準と同量同質と判断された場合の判断結果は「基準適合値」と名付けることにする。基準適合値を表す形式としては、“一樣”“相同”“差不多”などが挙げられる。このような立場にたつならば、本稿で扱う判断形容詞が表す判断結果は通常プラス値かマイナス値をとることになる。文法的直観としては、判断形容詞の反義語の対は「判断結果としてのプラス値とマイナス値との違いのみ」を表すと考えられがちである。しかし、さきに述べたように必ずしもそうではないことを示す用例が多々あり、意義素の記述または統合意義特徴の記述を注意深くやりなおさねばならないことは明かである。

2.0 分析対象とする言語資料

本稿で分析の対象とした言語資料は、中国語形容詞が動詞と組合わさって構成する次の3種類の統合型の用例を集めたものである。

- 述語結果補語統合型（以下、略称をVA型とする。Aは判断形容詞）
- 述語様態補語統合型（以下、略称をV得A'型とする。A'は状態形容詞）
- 状語中心語統合型（以下、略称をA'地V型とする。A'は状態形容詞）

（V得A'型とA'地V型内のA'はともに、VA型内の判断形容詞Aに①副詞“很”をつけた、または②重畳型への変換を加えた状態形容詞を表す）

これらの3統合型の用例をあわせて分析したのは次の理由による。

① 3 統合型の使い分けは外国人にとってなかなか修得しにくいものであるが、判断形容詞の判断方法と判断結果に関する意義特徴を明らかにしていくためには、名詞との統合よりも多くの語義的、文法的情報を提供しうると予想した。

② 本稿では統合型の統合意義特徴も単語の意義素と同じく、文法体系のなかで用法を相互に補いあい、示差的特徴⁽⁷⁾を分担していると仮定する。そうすると、同じ動詞と同じ形容詞をこの3種類の統合型に入れて、その統合型全体の意義（「統合意義」と名づける）を比較する場合は、その相互に異なる部分が統合意義特徴のうちの示差的特徴を反映しているとみなせるはずである。このようにして、統合意義特徴の違い⁽⁸⁾をより明らかにしていくことにより、判断形容詞の文法的意義特徴もより詳しく検討できると予想した。

③ ある動詞とある形容詞とが、ある統合型のなかで一緒に使うことができない場合、その共起制限が純粋に動詞と形容詞との意義素間のミスマッチであるのか、文脈上の他の文法的要素によって引き起こされたものなのか、または現実の状況で存在しえないという言葉の指示対象の有無を反映しているのか、を判断せねばならないが、その時に3種類の統合型の用法を比較対照することによって、判断の正確を期することができるかと予想した。

2.1 言語資料の作成方法

——【VA 型変換リスト】凡例と【調査Ⅰ】～【調査Ⅳ】の内容——

具体的に以上3種類の統合型の中に挿入して、4対の判断形容詞との組み合わせの成否とその語義を考察する動詞とその用例は、北京語言學院出版社1987《漢語動詞—結果補語搭配辭典》の項目から取り出した。

すなわち、判断形容詞が結果補語に使われている項目を選んで、①その用例の文脈の中でその判断形容詞を、反義語関係にある、もう一方の判断形容詞に入れ換えられるか、②用例中の動詞と形容詞の組み合わせをそのままに用いて、

A' 地 V 型と、V 得 A' 型への変換ができるかどうかの2点について、インフォーマント（男1人女2人）調査を行った結果が本稿の基礎的な言語資料である⁹⁾。

また、資料補充のために、安汝磐1990《實用漢語形容詞詞典》（中國標準出版社）の用例の中で“作状語”と“作補語”の項目に挙げられたものを取り出し、同様の調査をおこなった。

これらの言語資料を用いて個々の判断形容詞を検討するにあたり、まず【VA型変換リスト】の代表例として“長・短”の変換リストを挙げた後、以下に述べる4つの調査項目ごとに、該当する用例を動詞の如何に関わらず、まとめて列記する形で検討をすすめる。

【VA型変換リスト】凡例

一对の判断形容詞ごとの（相互）変換リストは実線で縦に4区分されている。

いちばん左の区分から右に向かい、【調査Ⅰ】～【調査Ⅳ】の結果が、それぞれのマークで記入されている。

【調査Ⅰ】例として「V長形変換リスト」を取り上げると、①“V長（了）”の例文の文脈のままで、“V短（了）”に入れ換えられるかどうか？、②“V長（了）”の例文の文脈には変更を加えるが、主語にたつ名詞はそのまま“V短（了）”に入れ換えられるかどうか？を調べる。

上記①のやり方で入れ換えられれば○マーク、入れ換えられなければ×マーク、入れ換えられるが名詞を変更する必要があった場合（上記②の場合）は×マークの横に①②…のアラビア数字をふって、例文を表外に記す。

また、表の中の「N」とはVA型の前に置かれた名詞を指し、その名詞が動詞のどの格を担うかは不問にしてある。さらに、主語名詞の一段下にもう一つ名詞が置かれている場合には、2通りの区別がある。①「↓」のマークが名詞の前につけてある場合は、VA型の前に2個以上の名詞があり、かつそのマーク付きの名詞が本来動詞の後ろ（VA型の後ろではない）に置かれるべき目的

語であることを示す。②介詞「把」と名詞が書いてある場合は、その用例が“把”字句であることを示す。

【調査Ⅱ】VA型の後ろに目的語が置けるかどうか？を調べる。その目的語は原則として、主語の位置で用いられた名詞を含めて、VA型の前で用いられた名詞を後方へ移動したものとす。主語の位置で用いられた名詞が動作主であった場合は当然移動は不可能であるので、【調査Ⅱ】は行えない。調査開始時点で、「VA型のままでは、まず使えない」という一致した語感報告があり、“VA了N”の形式で調査をすることにした。

◎マークは、“了”を付けずに“VA型+N”の形式で使えることを表す。○マークは、普通の意味すなわち「～をVしてAにした。」を“VA型+N”の形式が表すことを指す。△マークは原則として「目的語に指示詞をつけて特定化する」という条件をつけてはじめて使えることを表す。その具体的意味および特殊な例文は【調査Ⅰ】と同様、①②…のアラビア数字をふって表外に記す。

【調査Ⅲ】VA型からV得A'型への変換ができるかどうか？を調べる。

判断形容詞に副詞“很”をつけて成立する変換は「很」マーク(=“很”+判断形容詞)で表す。判断形容詞を重畳形にして成立する変換は「重」マーク(=判断形容詞+同じ判断形容詞)で表す。特殊な例文は、「很」「重」マークの横にabc……のアルファベットをふって表外に記す。その特殊例文中の「～」マークは1対の反義語が両方とも使えることを表す。

【調査Ⅳ】VA型からA'地V型への変換ができるかどうか？を調べる。

マークは【調査Ⅲ】と同じマーク、「很」と「重」を使う。特殊な例文も同様に、「很」「重」マークの横にabc…のアルファベットをふって表外に記す。

【調査Ⅲ】【調査Ⅳ】では、文脈意義の違いによって、変換型が使える使えないが微妙に影響される。特に使えないことを表す×マークは、3人のインフォーマントの回答がすべて、最初から×マークであったものに限り、採用してある。

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

以上のように内省報告および例文を採集する際、インフォーマント調査のつねとして、3人の意見が一致しない場合がある。その時は、意見のわかれた箇所のみをとりだして再チェックをかけ、次のように処理した。

- 1) 少数派（2：1に分かれた意見のうち）の意見に一定の傾向がみられたならば、その傾向を「個人言語」の特徴として記述する。
- 2) 例文を挙げて具体的に用法を示している場合には、その用例を取り上げて注記する。

3.0 物体の形状を表す判断形容詞

物体の形状を表す判断形容詞として4対の形容詞“長・短”“粗・細”“厚・薄”“大・小”を取り上げる。本稿では、人間が五感で物体の形状を捉えようとするとき、もっとも根元的な機能を果たす感覚を触覚（体性感覚の中心）と見なし、視覚の機能を後発の参与感覚とみなす議論を採用する。この原則にしたならば、“高・低・矮”“寛・窄”“深・浅”は掌の触覚よりも、視線を移動させて空間を目測して獲得した「点と点を結ぶ直線距離」を判断するものとして、形状を表す形容詞グループとは異なる「スペース形容詞」のグループとみなすべきである。3.11項で、両形容詞の類似点の一部にふれる。

議論を絞り易くするために、まず“V長形”“V短形”についてのみ、上記の凡例どおりの変換リストを示して、問題提起のきっかけとして使用する。他の形容詞についての変換リストは、調査項目別、議論別に該当する箇所を提示する。

3.1 【V長形変換リスト】【V短形変換リスト】

まず、北京語言學院出版社1987《漢語動詞—結果補語搭配辭典》pp.23-24

の“長”の項目の用例について上記4種類の調査を行った結果を、【V長形変換リスト】として示す。そして、その表中でアラビア数字やアルファベットで注記した箇所では報告された用例を表外に列記した。更に同書 pp. 123-124 “短”の項目についても同様の調査を行い、同様の形式で【V短形変換リスト】を作成した。

なお、=の下の用例は《實用漢語形容詞詞典》(既出)による補充例である。

【V長形変換リスト】

【調査Ⅰ】			【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】	
NVA型			VA了N型		V得A'型		A'地V型	
V長	N	V短	V長	V短	長	短	長	短
裁長	這條褲子	○	○	○	很重	很重	×重a	×重a
抻長	毛衣袖子	×①	○	×	很重	××	很b重b	××
放長	這件衣服							
	↓貼邊	○②	△	△	很重	很重	×重c	×重c
擰長	餃子皮兒	×	○	×	很重	××	××	××
鈎長	這條花邊	○	○	○	很重	很重	××	×重b
接長	褲腿	○③	△	△	很重	很重	×重e	×重e
鋸長	木板	○	×	×	很重	很重	很f重f	很f重f
拉長	你的臉	×④	○	×	很重	××	××	××
量長	尺寸	○	○	○	很重	很重	×重g	×重g
留長	她的頭髮	○	○	×	很重	很重	×重h	×重h
描長	她							
	把眉毛	○	×①	×①	很重	很重	很i重i	很i重i
切長	白菜絲	○	×	×	很重	很重	×重j	×重j
寫長	這個字⑤	○	△	△	很重	很重	很k重k	很k重k
織長	毛衣	○	△	△	很重	很重	×重l	×重m
做長	這件上衣	○	△	△	很重	很重	×重n	×重n
拉長	你							
	把皮筋	○	○	×	很a重a	很a重a	××	××

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

△が表す用法：你又 VA 了這個（主語名詞），または，你又 VA 了這個（↓目的語）：意味は「あなたはまた，（名詞）を VA した！」であり，二度目の失敗を指摘する表現意図を表す。副詞“又”を用いないならば，複句文の中の条件仮定を表す前分句として使われ，文として言い切れる陳述機能がなくなる。後分句には不都合を表す内容がくる。

【調査Ⅰ】注釈

- ×①把面條抻短點兒。（名詞を替えると，比較表現，命令表現として成立する）
- ②（魚釣りで糸を繰り出す場合などにも，よく使う）把綫放短點兒。
- ③這條褲子的褲腿又接短了，還是不能穿。（比較表現，命令表現でも成立）
- ×④“皮筋”など，名詞を変えれば“拉短了”も成立する。下の“拉長”参考。
- ⑤文章寫短點兒。→“寫長／寫短”は字体の形状の他に文章の長短も表す。

【調査Ⅱ】注釈

- ×①若い女性インフォーマント一人だけ，△マーク

【調査Ⅲ】注釈

很 a 重 a 你可以把皮筋拉得～～的。

【調査Ⅳ】注釈

- 重 a 從那塊布上～～地裁下一條。
- 很 b 重 b 橡皮筋被～～地抻到了地面。
- 重 c 把繩子～～地放出了一截。
- 重 d 短短地鈎了一條花邊。
- 重 e 把褲腿～～地接了一個邊兒。
- 很 f 重 f 他把木板～～地鋸下一截。
- 重 g ～～地量了一塊布。
- 重 h ～～地留了一截綫。（織毛衣時）
- 很 i 重 i ～～地描了一條綫。
- 重 j 長長地切下一塊。
- 很 k 重 k 在紙上～～地寫了幾句話。
- 重 l 長長地織了一條圍巾。
- 重 m 短短地織了一個邊。
- 重 n ～～地做裙子。

【V短形変換リスト】

		【調査Ⅰ】		【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】	
		NVA了型		VA了N型		V得A'型		A'地V型	
V短	N	V長	V長	V短	長	短	長	短	
裁短	衣服	○	×①	×①	很 重	很 重	× 重 a	× 重 a	
改短	(命令①)								

【調査Ⅰ】		【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】		
NVA了型		VA了N型		V得A'型		A'地V型		
V短	N	V長	V長	V短	長	短	長	短
	把那篇文章	○	△	△	很重	很重	× ×	× ×
剪短	她							
	把頭髮	○②	×	◎	很重	很重	× 重 b	× ×
揪短	你							
	把綫	○	×	×	很重	很重	很重	很重
鋸短	這麼木料	○	×	×	很重	很重	很 c 重 c	很 c 重 c
理短	(禁止③)	○	×	×	(很 a)	很重	× ×	× ×
量短	(禁止)	○	×②	×②	很重	很重	× ×	× ×
去短	(依頼④)	×	×	◎	(很 b)	很重	× 重 d	× 重 d
織短	你							
	這件毛衣	○	△	△	很重	很重	× 重 e	× 重 e
做短	這件上衣	○	△	△	很重	很重	× 重	× 重

△印は【V長形変換リスト】と同じ用法を示す。

【調査Ⅰ】注釈

- ①把那篇文章改短點兒，因為版面不夠了。
- ②冬天頭髮剪長些，不冷。(VA型の後ろに数量表現を付加した比較表現にすれば使いやすい。伝達ムードとしては、しばしば命令表現となる)
- ③你千萬別給我理短了，我留短髮不好看。
- ④這條褲子做長了，麻煩你給去短一點兒，可以嗎？

【調査Ⅱ】注釈

- ×①“衣服”は普通“大小”で判断される。目的語を“褲子”などに替える。
- ×②量短了尺寸。(【V長リスト】参照)“衣服”では使えない。

【調査Ⅲ】注釈

很 a 很 b 若い女性インフォーマントのみ可とする。
意味はともに「少ししかカットしていない。」

【調査Ⅳ】注釈

- 重 a ～～地裁下一條布。
- 重 b 短短地剪下來。
- 很 c 重 c ～～地織了一個花邊。
- 重 d ～～地去掉一截。

重 e ～～地織了一個花邊。

3.2 NVA 了型の統合意義特徴および判断形容詞の意義素について、 【調査Ⅰ】が与える情報の検討

まずこの【V 長形変換リスト】(以下、「長リスト」と略す)と【V 短形変換リスト】(以下、「短リスト」と略す)の2つの変換リストのなかで、【調査Ⅰ】の結果について検討を加える。【調査Ⅰ】の用例はほとんどすべて原資料とした北京語言學院出版社1987《漢語動詞—結果補語搭配辭典》の用例どおりであり、インフォーマントからの用例提供はない。このVA了型についての内省報告は、実際はNVA了型の統合型での成否を内省してもらったものであり、文として言い切れるかどうかその語感に含まれている。文として言い切れるということは、陳述機能が述部となるVA了型内の動詞Vと判断形容詞Aとの統合を促進する可能性がある。つまり、本来動詞に後置されている いろな格を担っている名詞NをVAに前置するという位置移動は、名詞Nに対するばかりでなく⁽¹⁰⁾、VA了型にも次のような文法的特徴をつけ加え、その共起制限をゆるめることができると予想される。①動詞の有意志特徴が消滅する(有意志特徴は“VA 點兒”という“形容詞+数量表現”で表示される)②“了”の語気助詞化により「変化の認識」が多様化する③言語形式として表現されている文脈的判断基準ばかりでなく、場面の状況による判断基準をも使用できる。事実、本稿の調査範囲内では【調査Ⅰ】で×マークがついた動詞と判断形容詞の組み合わせは、【調査Ⅱ】【調査Ⅲ】【調査Ⅳ】でも、すべて×マークがつけられた。このことは、NVA了型に関する【調査Ⅰ】の結果が、もっとも基本的かつ必要最低限の語義的共起制限を表すことを示している。

さてそこで、【調査Ⅰ】で×マークがついている形式(ここでは主語として 表中の名詞が用いられた場合には “V 長了”と“V 短了”のどちらか片方し

か成立しない型式)について検討することは、一対の形容詞の意義素または動詞と形容詞との共起制限に何らかのアンバランスがあることを明かにしようとすることであり、意義素記述にとって重要な情報を得られるものと考えられる。

【“長”しか使えない“VA了”】

(毛衣袖子①) 伸長了, (餃子皮) 擀長了 (反対の形状は“擀圓了”), (臉④) 拉長了

【“短”しか使えない“VA了”】

(褲子) 去短了 (反義語の対を補語に使うなら“去多了”“去少了”)

以上は3人のインフォーマントが一致して認めた使いにくいNVA了型である。そのうち、名詞の如何に関わりなく、動詞と形容詞との間でその語義的意義特徴どおしが排斥しあっているために成立しないと見なせるVA型は“擀短”“去長”の2形式である。これらの動詞の意義素に含まれる弁別の特徴がそれぞれ“長”“短”の意義素と排斥しあうことが認められるからである。

餃子を作る際の皮の目標とすべき形状、すなわち「動作“擀”のめざす異相⁽¹¹⁾の形状が“圓”であること」は動詞“擀”の弁別の特徴に数えるべきだと思われる。動詞の意義素をこう解釈するならば、“擀長了”にはいつも適正基準、つまりあるべき形状から逸脱したマイナス評価が伴うこと、程度の大小とは別の次元での「～すぎる」という意味があることも説明がつく。

また、衣類に手を加える意味での“去”という動作は「衣類の一部を取り除くことで、衣類を小型にする」という、流相における方法と異相における結果が決められていて、その結果“去”はVA型のなかで“短”と“薄”とは共起しても“長”“厚”とは結びつかないと考えられる。

“伸長了”“拉長了”は名詞を替えれば“伸短了”“拉短了”へ変換できる。この名詞の替え方は、①動詞の格を動作対象格(“毛衣袖子”)から生産物格(“面條”)へ替える②動作の仕方が足りない、長くすべきところが短いままであることを表現できる動作対象格(“皮筋”)に替えるというものである。

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

ここで動詞と形容詞を結び付けている VA 型の統合意義特徴として、前稿までに提起した 2 つの規定の他に、新たな統合意義特徴が抽出できそうである。

【NVA 了型統合意義特徴Ⅲ】⁽¹²⁾(ページ数は本文中、用例のある箇所)

形状を表す形容詞を結果補語成分とするには、「述語成分となる動詞の格を担わされた行為対象や生産物」さらには「道具 (p 134), 当体 (p 136), スペース (pp. 172~174), 身体部位 (p 136)」についての「動詞の異相に存在する物体としての形状に関する弁別の特徴」と、その形容詞の弁別の特徴とが抵触してはならない。

(この意義素どおしの共起制限を現象枠の観点から捉え直すところ記述できる)

NVA 了型内の形状を表す形容詞は「動詞の意義素が表示する現象素に内在する異相に存在する物体の形状」を判断対象とする。

この統合意義特徴は従来からの述語結果補語統合型に対する見解と何等かわりのない、新しい知見の無いものようではあるが、判断形容詞の判断対象となる物体が、述語である動詞の第一次格(注 3, 参照)を担うものばかりではなく、スペース・身体部位も含んでいることを指摘するものである。

3.3 一对の形容詞のうち、片方しか使えない NVA 了型についての検討

——【用例表 I】の作成と【NVA 了型統合意義特徴Ⅲ】の検証——

前項の【NVA 了型統合意義特徴Ⅲ】のなかのポイント「動詞の異相に存在する物体としての弁別の特徴」という規定を詳しく検討するために、ここでさらに他の 3 対の判断形容詞“粗・細”“厚・薄”“大・小”についても、片方の形容詞しか用いられないとされた VA 型の例を【用例表 I】として列挙する。

表内の書式は先に説明した、「長リスト」「短リスト」の凡例と同一であるが、【調査Ⅲ】【調査Ⅳ】については、 $\times a \times b \dots$ の符号で単語を一部入れ換

えた用例を注記した。表外左端の【変化パターン】の命名法は、次の通りである。

VA型内の動詞と形容詞、さらにVA型と主語に立った名詞との語義関係について考察を加えたうえで、【調査Ⅰ】【調査Ⅱ】【調査Ⅲ】の用法にある程度共通点が見いだされるVA型をグループにまとめ、その各グループに対して「動詞の異相に存在する物体」が変化していくパターンに注目して命名する。

【用例表Ⅰ……対の形容詞のうち、片方しかNVA了型に入らない用例】

変化パターン	【調査Ⅰ】		【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】		
	NVA了型		VA了N型		V得A'型		A'地V型		
	V粗	N	V細	V粗	V細	粗	細	粗	細
長期変化	使粗	筆尖	×①	×	×	很×	×a×	×	×
	V薄	N	V厚	V厚	V薄	厚×	薄	厚	薄
なりゆき	擦薄	這孩子							
		把紙(②)	×	×	×	×	×	×	×
有目的	剪薄	我的頭髮	×	×	×①	×	×	×	×
長期変化	磨薄	鞋底	×	×	×②	×	×	重	×
有目的	去薄	我的棉衣	×	×	○③	×	×	很重	×
長期変化	使薄	這把鏟子	×	×	×	×	×	很c×	×
長期変化	壓薄	那床被子	×③	×	×	×	×	很d重d	×
長期変化	用薄	這塊毛巾	×	×	×	×	×	很e×	×
	V大	N	V小	V大	V小	大	小	大	小
なりゆき	撐大	鞋	×	×④	×	×	×	×	×
なりゆき	戴大	這套手套	×	×	×	×	f	×	×
有目的	瞪大	兩個人							
		眼睛	×	◎	×	×	×	很重	×
有目的	泡大	木耳	×	×	×	×	×	很重	×

【調査Ⅰ】注釈

×①鞋帶兒都使細了。(名詞を“鞋帶兒”に替えれば使える)

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

②這孩子拼命用橡皮擦，…の文脈。

×③這塊材料壓厚了。(名詞を製品に替えれば，規格はずれを表せる)

【調査Ⅱ】注釈

×①你又去薄了我的頭髮！(“剪”でなく“去”なら使える。)

×②我找了你三年，磨薄了鞋底，總算找倒了。(「足を棒にして」の寓意を表す。)

○③「中の綿を取り出していく」意味。

×④名詞を“口袋”に替えれば，ごく普通の意味で使える。

【調査Ⅲ】注釈

× a 鐵鍬已經被使得很薄了。

× b 「意識的に擦り取る」のは“蹭”。“把紙蹭得很薄。”なら成立。

很 c 這把錘子被使得很薄了。

很 d 重 d 被子被壓得很薄。／薄薄的。(掛け布団を敷き布団として使う場面)

很 e 這塊毛巾被用得很薄了。

× f “載得很松”に替えると，大きくなった手袋を表せる。

【調査Ⅳ】注釈

× a 表面的油漆被～～地磨下一層。(名詞を“油漆”に替えれば使える)

× b 把里邊的棉花～～地去掉一層。(名詞を“棉花”に替えれば使える)

【調査Ⅲ】では“棉衣”全体が薄めに作られていることを表現する。

× c 把口袋很大地／大大地撐開。(名詞を“口袋”に替えれば使える)

× d 眼睛大大地瞪着。

【用例表Ⅰ】と，その注釈から NVA 了型の統合を支配する形式上の条件が 5 点見いだされる。

(1) 物体の変化パターンのうち「有目的」とは「主語名詞 N の表す物体を，動作主の意志によって特定の形状に変化させることを目的とされていること」を特徴とするパターンである。すなわち，N が VA 型内の動詞が表わす行為の対象となるのにふさわしい物体を表し，さきに規定した【NVA 了型統合意義特徴Ⅲ】のなかのポイント「動詞の異相に存在する物体としての弁別の特徴」を主語となる N が持っているものとみなせる。

変化パターンのうち，「長期変化」の物体（変化していくのに 1 日以上はかかる物体）には次の共通点が存在する。①“使”“用”という抽象的行為の対象ではあるが，異相においてどのような形状になるかについては，その動詞“使”“用”の意義特徴の中では全く特定されていない。むしろ，ある目的を達

成するための道具として動作の経過（＝流相）に深く関わる物体である。②“磨”“壓”という動詞の行為対象ではあるが、本来の有意志動作としての“磨”（磨く）“壓”（押しつける）の行為対象ではなく、ある使われ方（覆かれている、敷かれている）をしている時に自然の成りゆきで、磨かれることになったり、押しつけられることになったりする物体である。やはり①と同じく、ある他の行為を達成するための道具つまり動作の経過（＝流相）に深く関わる物体である。

(2) 「有目的」で、しかもその動作対象となる物体の形状変化が動作主の意志でコントロールできる行為を表す NVA 了型のみが【調査Ⅱ】の文型「VA 了 N」をとれる。“剪薄”だけが例外であるが、それは“頭髮”について“薄”の状態を問題にする場合、“去”という動作動詞が優先的に用いられるという、ある語義分野について類義語を集めた単語グループ（以下「シソーラス」と呼ぶ）内での役割分担によると考えられる。“剪”は散髪に関する動詞のシソーラスの中で、髪の“長・短”の性質を左右する役割を担っているが“厚・薄”には無関係である。しかし、この【調査Ⅱ】については、インフォーマントの個人言語に顕著な差異がみられるので、その処理については次項で詳説する。

(3) 前項で検討した「有目的」の特殊例“頭髮剪薄了”を除くと、物体の変化パターンのうち「なりゆき」だけが【調査Ⅲ】の文型「V 得 A' 型」をとれない。その原因は、いくつか考えられる。ただ、「なりゆき」の変化パターンを示す NVA 了型では、さきに規定した【NVA 了型統合意義特徴Ⅲ】のなかのポイント「動詞の異相に存在する物体としての弁別の特徴」を主語となる N が持っていない、という共通点のあることが、あらためて確認できるであろう。

“把紙都擦薄了”“這種綫手套，戴幾天就戴大了”が V 得 A' 型に変換できない理由は、まず拙稿 1995. p 30 で規定した次のような【“V 得”の文法的意義特徴】によって説明される。

「V 得」は事柄を示すにとどまり、動詞の表す弁別の特徴以外は表示しない形式であるために、「弁別の特徴以外の特徴を特に必要とするような動作」を指示できない。

“擦”の意義素には「物体の表面をこする+表面の付着物をはがす」という弁別の特徴は含まれていても、「物体をこすって削り取る」という意義特徴は、文脈によってつけ加えられる範囲内の語義的意義特徴にすぎない。すなわち、他の形式の語義的意義特徴と呼応することによって表し得るものであり、ここでは注記×②這孩子拼命用橡皮擦，…の文脈があつてはじめて抵抗無く理解される表現である。このように文脈によって表わされる異なる形式間の呼応関係を左右するような文法的意義特徴を本稿では「文脈意義」と呼ぶ。ここでは「動作行為の方法についての装飾」を表している。つまりVA型の成立そのものが文脈意義によって支えられているのであり“擦得”と“很薄／薄薄的”とはV得A'型のなかで共起できないのも当然といえる。“戴”の意義素についても、同様のことがいえる。その弁別の特徴は「身につける+その対象は筒状のものではなく身体に密着する形状の衣類・装飾品」であり、衣類・装飾品にどのような影響を与えるかについては全く定めるところがない。すなわち、異相での動作対象の形状については不特定である。そして“戴大了”の統合そのものも“戴幾天”という「動作継続時間の設定（長期間）」を表す文脈意義で支えられていることがわかる。

次に、“鞋緊一點兒沒關係，穿一穿就撐大了”について考える。“鞋”を“口袋”に替えれば、V得A'型“撐得很大／大大的”もA'地V型“大大地撐開”も成立する以上、まず、“鞋”が“撐”の対象としてふさわしくない物体であることが、その変換をさまたげていると考えられる。“撐”の意義素には「物体の幅を大きく広げる」という弁別の特徴があるが、“鞋”は幅を広げて更に有用性が増す物体ではないのに対し、“口袋”は広げれば広げるほど役にたつ品であり、“撐”の行為対象としてふさわしい。さらに文脈意義「先行する

行為の設定」, すなわち“鞋”に加えられた動作が“穿”であることが明記されていることも、形状変化を目的としていないことを示している。

それでは“鞋撐大了”の内の動詞“撐”が本来の意志的動作として具体的には実行されていないにも関わらず、NVA 了型内で用いられているのは何故であらうか？

馬希文 1987 「與動結式動詞有關的某些句式」《中國語文》第6期（總201期）では、NVA 了型（馬論文では $N_1 V_1 V_2$ 了型）の主語 N_1 と述語 V_1 との関係をいくつかに分類したうえで、両者に全く語義関係が成立しない例があることを指摘し、“ $N_1 V_1 V_2$ 了”を“ $N_1 V_2$ 了”の拡張形式であるとしている。その用例をいくつか引用する。(cf. は本稿での補注)

<u>$N_1 V_1 V_2$ 了</u>	<u>$N_1 V_2$ 了</u>	<u>$N_1 V_1$ 了</u>
衣裳晾乾了。	衣裳乾了。	衣裳晾了。 (受事主語句)
茶沏釀了。	茶釀了。	茶沏了。
帽子吹掉了。	帽子掉了。	? 帽子吹了。
小王洗累了。	小王累了。	小王洗了。 (施事主語句)
樹長斜了。	樹斜了。	樹長了。 (cf. 当体主語句)
刀切鈍了。	刀鈍了。	* 刀切了。 (工具主語句)
鉛筆寫折了。	鉛筆折了。	* 鉛筆寫了。
a 頭髮愁白了。	頭髮白了。	* 頭髮愁了。 (不知道應該叫做
b 肚子笑痛了。	肚子痛了。	* 肚子笑了。 什麼句子……)
c 鞋洗濕了。	鞋濕了。	鞋洗了 ⁽¹³⁾

(? = 極めて使いにくい表現, * = 非文法的表現)

最後の3例 abc が述語 V_1 と主語 N_1 との間に格関係が成立しない、つまり語義的な関係が成立しない例である。そのなかで、身体部位を主語とする VA 了型 ab は、「身体部位」というシソーラスに特有の文法的意義特徴の一つ、「身体を持ち主の行為・感情の影響を受ける」を勘案する必要があると考えられる。c “鞋洗濕了”も、“鞋”が「身につけて用いる生活必需品である」という弁別の特徴を持つために、「履いていることは言わなくてもわかる」という表現力（文脈意義・先行する行為の設定）を発揮することに拠って成立してい

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

る、つまり、c「鞋洗湿了」の統合意義である「洗濯をする時に履いていた鞋がぬれてしまった」は、“鞋”を動作主の「擬似的身体部位」とみなすことで成立しているのではないだろうか？ そうすると、*鞋洗得很湿が不成立であることも語義上の共起制限が一因であると、すぐ了解できよう。

この解釈は、名詞“鞋”がVA了型“撑大了”とは共起できるにも関わらず、何故V得A'型“(被)撑得很大/大大的”と共起できないかを説明する場合にも効果的であることによって、その妥当性が裏付けられる。文法面からみれば、VA型内のAは判断形容詞であり、前置される格が判断対象格であるのに対しV得A'型内のA'は状態形容詞であり、前置される格が描写対象格であるという違いが存在している。拙稿1995.p52では、判断対象格と描写対象格との違いを次のように規定した。【 】内は本稿での補充。

判断(評価)対象格は判断(褒貶)形容詞の弁別的特徴に必ず含まれる意味的事項「スケールの基準」「スケールをあてる方法」「判断・評価結果」について、そのスケールと呼応できる弁別的特徴をもつ名詞・事柄表現【形容詞、動詞、述語目的語統合型など】によって担われる。それに対し、描写対象格は「名詞・事柄表現が指示する(弁別のとは限らない)意義特徴をとらえて描写叙述する、描写形容詞」の格となる。

これは、描写対象格と状態形容詞(A')との共起関係を決定する文法的機能は、名詞の方に優先的に与えられているとした規定である。V得A'型“(被)撑得很大/大大的”において“很大/大大的”の描写対象格はあくまで“撑”された物体(の大きさ)でなくてはならない。しかるに上記の如く、“鞋”の弁別的特徴を「履かれること、しかも擬似身体部位とみなされるほど、密着している」とみなすならば、通常“鞋”に加えられる動作は“穿”であるという前提が成り立つ。具体的動作として“撑”すべき対象として文脈意義が補充されていたとしても、“鞋”が指示する現象素⁽¹⁴⁾が、ある状況内での存在としては履いている内に多少の大きさの変化を見せていたとしても、通常の“穿鞋”

が表示する「現象枠」の中では“很大／大大的”で描写されるほどの形状は見だせない。したがって“鞋撐得很大／大大的”も不成立になると解釈できる。一方、VA型内の判断形容詞“大”は、拙稿1995の【VA型統合意義特徴Ⅱ】(注12, 参照)に拠れば、平相での靴の大きさを判断基準として、「(単により)大きくなった」という単純な変化を認める判断結果を表すと考えられる。“鞋”がどのような弁別的特徴を持つかについては不問のままでよい。この「単純な変化」の概念については次項であらためて検討する。

(4) 【調査Ⅲ】のV得A型において、「有目的」パターンが①NV得A'型 ②(動作主)+“把”+NV得A'型、の統合型をとるのに対し、「長期変化」パターンは原則として、N+“被”+V得A'型、の統合型をとる。

(5) 【調査Ⅳ】のA'地V型においては、「有目的」パターンのなかでも形状の変化を最後まで意志的に左右できる物体(【用例表Ⅰ】では“眼睛”)の形状についてだけ表現できる。

さて、以上5点の形式上の条件を通して、形状を表す判断形容詞の文法的意義特徴をひとつ、抽出できるのではないかと考えられる。

【形状を表す判断形容詞・文法的意義特徴Ⅰ】

ある行為の道具として用いられる物体Nを主題とし、その行為Vが行われる動作過程で自然に生じた形状変化(経過時間には数時間から数年に及ぶ幅がある)の結果Aを、NVA了型の統合型を用いて表すことができる。動詞Vは、本来の有意志特徴を抑圧された、過程のみを表す「流相表現用の動詞」となる。

先に引用した論文、馬希文1987の用例などから、この文法的意義特徴は形状を表す判断形容詞に固有の特徴ではなく、むしろ「道具格(第二次格)を主語の位置に移動して主題化する場合の位置移動に関する統合意義特徴」が表されている可能性もある。しかし、本稿で採りあげた検討対象の範囲内では、上記の記述に止めておく。

3.4 VA 了 N 型の統合意義特徴および判断形容詞の意義素について、 【調査Ⅱ】が与える情報の検討

——VAN 型統合意義特徴の規定——

次に「長リスト」「短リスト」についての【調査Ⅱ】VA 了 N 型の検討にはいる。【調査Ⅱ】では、NVA 了型内の VA 了型（他の統合型の一部として扱う場合、以下 [VA 了] と表記する）と異なり、VA 了 N 型の一部としての [VA 了] には陳述機能が付加されておらず、あくまでも叙述レベルでの統合意義特徴だけが示されているはずである。その点、拙稿 1995 で検討した連体修飾統合型 [VA (了) 的 N 型] における [VA 了] と同じく、[典型 VA] (VA 的 N 型を成立させる) についての知見が得られるものと予想される。その他、動詞目的語が後置されている以上、VA 了 N 型の前には文脈意義として有意志の動作主を想定する用法となるため、VA 了 N 型の統合意義特徴内には何かしらの「動作主の意志に関する語義的特徴」が存在すると予想される。そして、それが「VA 了 N 型内における [VA 了] の動詞と形容詞の共起制限に影響を与える可能性は充分にあると考えられる。

まず最初目につくのは、【調査Ⅰ】から【調査Ⅱ】への変換パターンに3種類あることである。それらを P①、P②、P③と名付けて、該当する項目をリストアップする。“V 長”形は「長リスト」の項目、“V 短”形は「短リスト」の項目であり、／の右側の名詞は、その項目の用例に使われた名詞を示す。() 内 (長または短) は“V 長”の方であるか、“V 短”の方であるか、それとも“V 長”“V 短”双方であるかを示す。なお、当然のことであるが、【調査Ⅰ】で×印のついた、すなわち使えないとされた [VA 了] は、このパターン分けから除外してある。

P①パターン [P②パターンと対比しつつ検討する]

例文中の名詞との組み合わせでは“NVA了型”が成立するにも関わらず，“VA了N型”が成立しない。（【調査Ⅰ】で○，【調査Ⅱ】で×）

鋸長／木板（長，短）	留長／她的頭髮（短）（長→P③）
描長／自己的眉毛（長，短）	切長／白菜絲（長，短）
拉長／皮筋（短）（長→P③）	
剪短／頭髮（長）（短→P③）	揪短／錢（長，短）
鋸短／好的木料（長，短）	理短／（髮）（長，短）
量短／衣服（長，短）	去短／這條褲子（短）

P②パターン [3.6項に於いて検討する]

“VA了N型”のNに“這，那”を付けてはじめて使えるようになり，文を完成するための文脈のつくり方に特徴がある。（【調査Ⅰ】で○，【調査Ⅱ】で△）

接長／褲腿（長，短）	寫長／這個字（長，短）
織長／毛衣（長，短）	做長／這件上衣（長，短）
改短／那篇文章（長，短）	

P③パターン [3.5項に於いて検討する]

例文中の名詞との組み合わせでは“NVA了型”も“VA了N型”も成立する（【調査Ⅰ】も○，【調査Ⅱ】も○）

裁長／這條褲子（長，短）	鈎長／這條花邊（長，短）
拉長／你的臉（長）（短→P①）	量長／尺寸（長，短）
留長／頭髮（長）（短→P①）	
裁短／衣服（長，短）	剪短／頭髮（短）（長→P①）

以上P①P②P③のリストうち，その成員について際だった共通の特徴を一眼して指摘できるのはP③であろう。そこでP③パターンから検討を始める。

3.5 VA 了 N 型が「単純な変化結果」を表す用例についての検討

——【用例表Ⅱ】の作成と【VA 了 N 型統合意義特徴ⅠⅡ】の規定——

まず、P③パターンについての内省報告のバラツキは“剪短”（P①パターンの項で検討する）を除けば一箇所だけである。それは“裁短”の目的語となる名詞についてであり、男性インフォーマントによれば、“衣服”では抽象的すぎ、かつ“衣服”はもともと“大小”で判断されるべきものだという印象を与えるために、“裤子”“裙子”など一般に“長短”で判断されるものと入れ換えた方がよいという。しかし女性インフォーマントは二人とも目的語を“衣服”のまま可とした。

本稿が認める P③グループ VA 了 N 型に共通の特徴とは、“長”“短”ともに P③グループに属する VA 了 N 型のなかから見いだした特徴、「動詞の目的語となる名詞の意義素の中に、その動作動詞が表す動作を受けるという弁別的語義特徴が含まれる」ことである。衣類はその作られる過程において“裁”されるべきものであり、レースはカギ針という道具で“鉤”されるべきものであり、いかなる物の寸法であろうと寸法は“量”されるべきものである。頭髮はハサミでカットされるのが自然である。

この解釈を押し進めると、P③パターンの VA 了 N 型の“長”，“短”は、「名詞の表す事物に対してイメージされている常識基準」を判定基準としている可能性があるといえる。単独で思い浮かべられる VA 了 N 型全体の意義（統合意義）が、「衣服としてはナガク裁った」「レースとしてはナガク編んだ」「某某のヘアースタイルとしては短くカットした」という意志的行為を含意しているという、一致した内省報告も、これらの VA 了 N 型内での形容詞が「目的語 N が表している事物の常識基準と比較して、その常識基準よりプラスあるいはマイナスの値を示す」という「単純な変化結果」を表すことを示して

いる。その変化結果は、動作行為が失敗した、または成功したという褒貶義と全く関係のない概念である。このような目的語となる名詞の意義素が動詞を選択するという文法的意義特徴を「述語に対する目的語優位の共起制限」と名付け、他の形容詞を使った P③ パターンの VA 了 N 型ばかりでなく、P② パターンの (△マーク) の VA 了 N 型にも見られるかどうか、以下検討していくことにする。

なおこれまで「VA 了 N 型をとれる [VA 了] は、動作の進行に伴って生み出された穏当な結果を表す、すなわち典型的 VA 型である」とする見解が、一種の文法的直観として存在していたのであるが、P③ パターンの [VA 了] での動詞と形容詞の関係をみる限りでは、一概にそう結論することはできないようである。なぜなら“剪短了頭髮”以外は、その動作によってナガイ・ミジカイどちらの形状をも生み出せる行為を表し、その動詞は生産物格（動作を経てはじめて存在する事物）をとるものだからである。つまり、どちらの方向への変化を穏当な変化とみなせるかという判断が、生産物を産み出す過程に関しては一方向に決定できないからである。そして反対にまた、このように形容詞と動詞との語義関係が双方向スケールで成立するような VA 型と名詞とが組み合わせさせた NVA 了型の内、VA 了 N 型へ変換できないものも数多くあるからである。したがってなにをもって [典型 VA] とみなす根拠にするかについては、他の形式上の基準を見いだす必要があるといえる。

さて、【調査Ⅱ】で◎マークがついている“剪短”の代表的用例は以下のようなものである。

他見她以前，剪短頭髮，刮光鬍子。

(彼は彼女に会う前に、散髪をし、髪を剃った)

インフォーマントの内省報告では“了”を抜いた◎の統合形式 VAN 型は、①文としては言い切れなくなる。②これから始める意志的行為を表す。という共通の統合意義特徴を表している。

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

他の動詞と判断形容詞を用いた VAN 型においてもこの 2 点の統合意義特徴は共通して認められるゆえ、ここで VAN 型の統合意義特徴を次のように規定しておく。

【VAN 型の統合意義特徴 I, II】

I 陳述機能をかぶせることができない、叙述レベルに限定された統合型である。「列挙・対比する叙述の営み」を統合意義特徴として有するため、単独で叙述を終えられず、言い切ることができない。

II 動詞にはかならず有意志特徴を付加し、その動作主格を文脈意義として顕在的であれ潜在的であれ必要とする。

さて、ここで本稿の言語資料をすべて検討対象とする。

つまり、以上 P③パターンについて検討してきた文法的特徴の妥当性を検証するために、以下、“粗・細”“厚・薄”“大・小”の変換リストにおける P③パターンを、○ (=VA 了 N 型), ◎ (=VAN 型) 双方とも【用例表 II】として列挙する。凡例は【用例表 I】に準じる。また、表外左端の【動作方向】は、【調査 II】において、一対の判断形容詞のうち片方しか VA 了 N 型に入れない用例が持つ、共通の文法的意義特徴の存在を標したもので、後に詳しく考察する。

【用例表 II ……動詞の格を担う名詞を本来の位置、動詞の後方へと戻す用例】

動作方向	【調査 I】		【調査 II】		【調査 III】		【調査 IV】		
	NVA 了型		VA 了 N 型		V 得 A' 型		A' 地 V 型		
方向指定	V 粗	N	V 細	V 粗	V 細	粗	細	粗	細
		描粗	(命令)						
		把這條綫	○	○	○	很 重	很 重	很 重	很 重
方向指定	V 粗	N	V 細	V 粗	V 細	粗	細	粗	細
	寫粗	這個筆道	○	◎①	◎①	很 重	很 重	很 重	很 重
方向指定	V 厚	N	V 薄	V 厚	V 薄	厚	薄	厚	薄
	墊厚	鞋底	○①	○	×	很 重	很 重	很 重	很 重

動作 方向	【調査Ⅰ】			【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】	
	NVA了型			VA了N型		V得A'型		A'地V型	
方向 指定	V厚	N	V薄	V厚	V薄	厚	薄	厚	薄
	鋪厚	褥子	○	○	○	很重	很重	很重	很重
方向 指定	V薄	N	V厚	V厚	V薄	厚	薄	厚	薄
	墊薄	褥子	○	○	×	很重	很重	×重	×重
方向 指定	V大	N	V小	V大	V小	大	小	大	小
	放大	這張照片	○②	◎	×	很重	很重	××	××
方向 指定	畫大	素描的鼻子	○	◎	◎	很重	很重	×a×a	××
	開大	你							
方向 指定		把窗戶	○③	◎	×	很重	很重	×b×b	××
	留大	地方	○	○	○	很重	很重	××	××
	張大	他愛人							
		↓嘴	○④	◎	×	很重	很重	很重	××
	V小	N	V大	V大	V小	大	小	大	小
	留小	你							
		把空兒	○	○	○	很重	很重	××	××

【調査Ⅰ】注釈

- ①「厚くする分が足りない。」というマイナス値。
- ②放小一點兒。(數量表現を加える)
- ③開小一點兒。(數量表現を加える)
- ④齒を抜いたあとなど、普段より小さめの口の開け方を表す。

【調査Ⅱ】注釈

- ①寫粗這一筆，寫細那一筆。(對比表現にすると使いやすい)

【調査Ⅳ】注釈

- ×a×a 很大地・大大地畫了一個圓圈兒。
(名詞を「形の決まっているもの」に替えると、使いやすい。)
- ×b×b 動詞表現を“打開了”に替えると、使えるようになる。

【用例表Ⅱ】は3人のインフォーマントから最初の報告が一致した用例ばかりである。【用例表Ⅱ】で、まずVAN型◎印のつけられた組み合わせについて

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

て検討すると、①生産物ではなく行為対象をNにとっている、②1対のうち片方の判断形容詞しか用いられない、という2条件を満たすVA型を「典型的VA型」と認めてよいかと考えられる。しかし、この基準で見いだされる形式はわずか、“剪短”“去短”“開大”“放大”“開大”“張大”だけである。

次にVA了N型の統合意義特徴を検討する。本項でVA了N型の検討対象とする用例はP③パターンの中でも、VA了N型において一対の形容詞の双方が使えるとされているもの(○○, または◎◎の印)に限る。なぜならば、片方の形容詞しか使えないVA了N型(【用例表Ⅱ】で動作方向「方向指定」というマークがつけてある)については、判断形容詞内の文法的意義特徴の差異がそのVA了N型の統合意義特徴に影響しているとみなせるからであり、VA了N型の統合意義特徴のみを見いだそうとする場合の言語資料としてはふさわしくないと考えられるからである。この、方向指定のマークがついている用例については、次の3.6項で詳しく検討する。

【用例表Ⅱ】での動詞“描”“寫”“鋪”“畫”が使われている例を考察する限りでは、少なくとも下記2点の統合意義特徴による解釈が成立しないようなVA了N型は見あたらない。もし、これらの動詞が他の形容詞や名詞との組合わさった場合に、この2点の統合意義特徴に抵触するがゆえにVA了N型への変換がきかないことが確認されたならば、この2点の統合意義特徴の文法的意義特徴としての有効性が確認されたといえる。この裏付けは次項で検討する。

【VA了N型の統合意義特徴Ⅰ, Ⅱ】

- I 動詞の目的語となる名詞の意義素の中に、その動作動詞が表す動作を受けるといふ弁別の特徴が含まれるという、「述語に対する目的語優位の共起制限」が存在する。
- II その判断形容詞について設定される判断基準は「名詞の表す事物に対してイメージされている常識基準」である。

3.6 VA了N型が「過分義」を表す用例についての検討

——【用例表Ⅱ付表①②】の作成と【VA了N型統合意義特徴Ⅲ】の規定——

【VA了N型の統合意義特徴Ⅰ・Ⅱ】の裏付けをとるための言語資料として動詞“描”“寫”“鋪”“畫”が使われている他のパターンのNVA了型について、その変換例を調査した資料を【用例表Ⅱ・付表①】（【付①】と略称する）として以下に示す。そして、改めて【用例表Ⅱ】（【Ⅱ】と略称する）の用例も引用しながら、考察を加えることにする。言語資料の特徴を再確認しておく。【Ⅱ】の用例はNVA了型からVA了N型への変換が成立し、【付①】の用例は、その変換が成立しにくい。

【用例表Ⅱ・付表①】

【パターン】 【調査Ⅰ】 【調査Ⅱ】 【調査Ⅲ】 【調査Ⅳ】

		NVA了型	VA了N型		V得A'型		A'地V型	
P①	描長	她						
長リスト		把眉毛	○	×① ×①	很重	很重	很重	很重
P②	寫長	這個字	○	△ △	很重	很重	很重	很重
長リスト		寫大	那幾個字	○	× ×	×重	×重	×重
P①	寫小	你						
		把字	○	× ×	很重	很重	×重	×重
P①	鋪薄	床鋪	○	× ×	很重	很重	很重	很重
P①	畫粗	右胳膊	○	× ×	很重	很重	很重	很重
P②	畫細	這條綫	○	△ △	很重	很重	很重	很重
P①	畫小	房子	○	× ×	很重	很重	很重	××

(×①は若い女性一人, △=「～すぎる」で使えるとしている)

“描”という動作を受けるのが当たり前とみなされるのは“綫”（【Ⅱ】）であ

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

って、“眉毛”を化粧のときに描く（【付①】）という動作は、顔の部位としての本来の眉と結びついてはいない。ただし、化粧という行為に注目し、化粧のポイントとしての眉をイメージするならば“描”されることは弁別的語義特徴ととれる可能性もある。事実、若い女性インフォーマントの内省報告では、“描長了眉毛”“描短了眉毛”は「眉を長く／短く書きすぎた」意味を表し、化粧が失敗したことを表すという。このように、適正基準を逸脱（プラス値の方向とマイナス値の方向の二通りがありうる）していると判断することを、「過分義を示す」と呼ぶことにする。この過分義を表すVA了N型は本稿の変換表内では△マークがつけてあり、NVA了型からVA了N型への変換パターンのうち（p140）、P②パターンに属する。

しかし、この場合でもNVA了型（特に意志的行為を表す“VA一會兒”形）の方では過分義がまったく表されていないことを確認しておきたい。

調査対象とした原用例は次のとおり。

她總願意把自己的眉毛描長一會兒。

（彼女はいつだって自分の眉を長めに描くのが好きだ。）

“筆道”は文字の一画一画の筆使いのことであり、書道の技術点に関わる形のことであり、動詞は“寫”に決まっている（【Ⅱ】）。この組み合わせのVAN型は、テクニックとして単に「筆画を太めに書いたり、細めに書いたりする」意味、すなわち動作行為の単純な結果を表せる。それに対し、本来“寫”されて生み出される、いわば本命の生産物であるはずの“字”については、“寫長／短了字”の統合型に対してインフォーマント全員から△マークの報告、すなわち過分義（「～すぎる」）を表す使い方ができるという報告があった。さらにまた、“寫大／小了字”については使わないという×マークの報告があった（【付①】）。

この“字”に関する用法の違いは、先に仮定した【VA了N型の統合意義特徴Ⅰ、Ⅱ】では説明がつかないことなので、使える文脈はないかと再確認を

求めてみた。すると、VA了N型の使用には一番慎重な年配の女性インフォーマントから、「又～～了這個N！」（また、このNも～～してしまった！）“要是～～了N，……。”（もしNを～～してしまうと，……という事態になる）などの「失敗したことを表す文脈では自然に使える」との回答があった。そこで、この文脈で用いることを意識したなら使えるか？ と質問したところ、数量的にはいちばん多くのVA了N型に「口語なら問題なく使えるのではないか」と回答していた若い女性はもちろんのこと、若い男性も「それまで×マークとしてきた用例の多くが使えるようになる。ただし、失敗したという感覚がある場合で、ふつうの表現なら“把”字句で表す。“把”字句は普通の意味と失敗した意味と両方使える」との回答を寄せてきた。そこで、【VA了N型統合意義特徴Ⅲ】として、次の文法的意義特徴を認めることにする。

【VA了N型の統合意義特徴Ⅲ】

動作行為の対象となる物体、または動作行為の結果生じる生産物にとって、加えられる動作行為が目標とする適正基準が文脈意義として顕在化している場合、「動作行為が失敗して適正基準から逸脱した結果としての過分義」を判断形容詞で表す。

この統合意義特徴は【調査Ⅱ】の検討を始める際に存在しているであろうと予想した「動作主の意志に関する何かしらの語義的特徴」（p 139）が統合意義特徴として、このVA了N型の共起制限に影響していることを示している。

“寫大／小了字”の統合型に対して、当初×マークの回答ばかりがそろったことは、字を書く行為にとって字形“長／短”は常にじょうず・へたという技術の関心事となる、つまり字形には手本とされる常識基準が存在するのに対し、字の大きさ“大／小”にはそういう常識基準が存在しないためと考えられる（付①）。しかし、字を書く行為というものは、技術的関心もたれやすいものなので、それぞれの状況で適正基準が存在することが明示されたなら、その文脈意義（「適正基準の明示」）にささえられて、「不適切という貶義」の価値観

を持つ「過分義」が表されると考えられる。なお、定義の内容を再確認しておきたいが、この過分義という文法的概念は、基準より単に数値的にマイナス方向またはプラス方向に超過しているという「マイナス値」「プラス値」とはまったく別の概念である。

“鋪厚／薄了褥子”は“褥子”の常識基準となる厚さに比べて厚めに敷いたか、薄めに敷いたかを表す（【Ⅱ】）。しかし、“床鋪”という寝具一式を行為対象にした“鋪厚／薄了床鋪”は、動作行為としての具体性が薄れ、寝る準備として寝具一式をいつもに比べ（旧態基準）たり、他の寝具に比べ（具体基準）たりした場合の表現となり、NVA 了型でその判断結果を表すだけである（【付①】）。原用例は次のようなものである。

床鋪鋪薄了，略得慌。

（寝床を薄くひかれて寝心地がわるくてしかたがない。）

“畫”という動作では“鼻子”の大きさに関してのみ、VA 了 N 型を用いても、単なる大きめ小さめの表現ができると当初から報告がそろった（【Ⅱ】）。これは顔の一部として普段から常識的なバランス感覚があるからではないだろうか？ また、“綫”が“畫”の行為対象となる時にはすんなり VA 了 N 型で使う事ができないが、それは絵のなかのラインを指すため、常識基準が存在しないためと考えられる（【付①】）。

次に、【VA 了 N 型の統合意義特徴Ⅲ】の文法的有効性を裏付ける言語資料として、【調査資料Ⅱ】で△マークのついた用例、即ち「長リスト」「短リスト」における P ②パターンと同様の変換パターンを持つ NVA 了型のリストを、【用例表Ⅱ・付表②】として以下に挙げる。表中の VA 了 N 型は、当初、若い女性インフォーマントがすべて使えるとしたもの、そして再調査で二人のインフォーマントが共通して過分義を表す用法を認めたものである。本稿の言語資料のうち、他の VA 了 N 型については年配の女性インフォーマントから最後まで「言えるかもしれないけれど、自分は使わない」との内省報告があっ

たので、除外した。

【用例表Ⅱ・付表②】

【調査Ⅰ】			【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】	
NVA了型			VA了N型		V得A'型		A'地V型	
V細	N	V粗	V粗	V粗	粗	細	粗	細
押細	面條	○	△①	×	很重	很重	× ×	× ×
磨細	那條鐵綫	○②	△	△	很重	很重	很重	很重
切細	你							
	把黃瓜絲	○	△③	×	很重	很重	很重	很重
旋細	這根木棍	○	△	△	很重	很重	× 重	× 重
V厚	N	V薄	V厚	V薄	厚	薄	厚	薄
絮厚	這件棉襖	○	△	△	很重	很重	× ×	× ×
V薄	N	V厚	V厚	V薄	厚	薄	厚	薄
刨薄	這塊木板	○	△	△	× ×	很重 ^a	× ×	× 重
鋸薄	這塊木板④	○	△	△	很重	很重	× ×	× ×
絮薄	這件棉襖	○	△	△	很重	很重	× ×	× ×
織薄	我的毛衣	○	△	△	很重	很重	× 重	很重
做薄	你的棉褲	○	△	△	很重	很重	很重	很重
V大	N	V小	V大	V小	大	小	大	小
裁大	這領子	○	△	△	很重	很重	× 重	× ×
刻大	圖章的字	○	△	△	很重	很重	× 重	× 重
織大	這毛衣	○	△	△	很重	很重	× ×	× ×
鑽大	眼兒 ⑤	○	△	△	很重	很重	× ×	× ×
V小	N	V大	V大	V小	大	小	大	小
裁小	這件衣服	○	△	△	很重	很重	× 重	× 重
打小	這件毛衣	○	△	△	很重	很重	× ×	× ×
刻小	圖章的字	○	△	△	很重	很重	× 重	× 重
鑿小	你							
	把窟窿 ⑥	○	△	△	很重	很重	很重	很重

この【用例表Ⅱ・付表②】のなかでは、NVA 了型の主語名詞で、かつ VA 了 N 型の目的語名詞として取り上げられている物体 N に、次のような共通の語義的特徴が存在していると考えられる。

(1) 何かの技術的関心の的となる。

注釈番号①の麵類の太さは、太い麵をわざわざ作る場合もあるので、貶義である「過分義」を表す VA 了 N 型で使われるとは限らない。しかし【調査Ⅲ】での“很粗／粗粗的”は、「へたである」というマイナス価値がすぐ思い起こされるという。同様にまた、注釈番号③のキュウリの千切りが“粗”で失敗を表すのに対し、「長リスト」にあった白菜にはまず、VA 了 N 型が使われない。それは、日常のお惣菜として、その切り方に技術的な関心がはらわれることがないためとみなせる。

形状についての関心が高い衣類については、過分義を含まない単なる形状を表すならば“她做(好)了一件薄棉褲”のように連体修飾成分として名詞の前におかれるのが常用表現である。

(2) できあがった形状が何かの有用性をもつ。

注釈番号②は工場製品としての鉄線ならば厚め薄めを問題にするので使える。名詞も“鉄絲”の方がふさわしいと二人のインフォーマントが述べている。

注釈番号④は“厚・薄”が丸太を作るときの出来映えを表す用例であり、“鋸”の動作対象として“木板”を使ったものである。原用例は次の通り。

這塊木板他給鋸薄了，不能用了。

(この丸太は彼に薄く切られてしまった、もう使いものにならない)

丸太の製品としての形状如何がその使いで(つまり何枚分の厚みをみるか)を左右する場合の表現であり、その丸太の厚みには確かに適正基準が存在する。それに対し、“長・短”の用例では同じ木を切る“鋸”と“木板”の組み合わせであるにも関わらず(「長リスト」「短リスト」)、VA 了 N 型への変換がきかなかつた。これらの内省報告は当初から一致していたものであるが、インフ

オーマント自身にも「使わないと思う」以上の語感がなかったが、一人「“木材”なら、もうできあがった製品という感じがする」という解釈をしているだけであった。ただし、次の“鋸大”と“木頭塊兒”との用例では、「たきぎくらいにしか使えない木切れだから、VA了N型をわざわざ使うことがない」という語感と、「“他量錯了尺寸，鋸大了木頭塊兒”という文脈でVA了N型があれば使える」という語感が報告された。いずれも、【VA了N型の統合意義特徴Ⅲ】の規定を素朴な語感として表明していると考えてよいであろう。

你把這塊木頭（塊兒）鋸大了，再鋸下一條兒去罷。

（あなたはこの材木を大きめに切った、もう一枚切り落としなさい。）

さらに注釈⑤⑥の用例がプロの大工の仕事ぶりを述べる文脈で使われていることも、VA了N型のもつ統合意義特徴が文脈意義に反映した結果とみなせるであろう。VA了N型への変換前の原用例（NVA了型）は次の通り。VA了N型は同一の文脈で使われる。

⑤眼兒鑽大一点兒，不然螺絲拧不進去。

（穴をもう少し大きく掘り抜かないと、ねじが入らない。）

⑥你把窟窿鑿小了，風斗安不進去。

（穴のあけ方が小さすぎて、空気抜きがとりつけられない。）

3.7 (N) VA了型が表す「単純な変化結果」と「過分義」

——陸儉明論文と「動作・行為の方向指定」との関連付け——

【調査Ⅱ】を通してVA了N型に過分義という判断結果の存在することが明らかになったが、それは「～すぎる」という日本語表現のもつ「過ぎたるは及ばざるが如し」というマイナス価値観と符合する語義であった。ここで、これまでVA了型の表す語義的特徴について論じた論文のうち、この過分義を取り上げた論文、陸儉明1990「“VA了”述補結構語義分析」《漢語学習》第1

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

期 pp 1-6 を紹介して、VA 了 N 型と NVA 了型の統合意義特徴の違い、および判断形容詞の意義素について、さらに検討を加えることにする。

陸論文では、VA 了型を主語としての N、目的語としての N から切り離して、単独の構造（統合型）として扱っている。そして、その表す意味を“某種結果的實現”すなわち本稿でいうところの「単純な変化結果」と“預期結果的偏離”すなわち本稿でいうところの「過分義」の 2 種類に分類している。そして VA 了型の統合意義がどちらになるかを決定する要因として、まず最初に形容詞の語義を“含有褒貶意義色彩的形容詞、用 A1 表示”⁽¹⁵⁾と“余下的能進入 VA 了格式的形容詞、用 A2 表示”⁽¹⁶⁾に 2 分類している。本稿で扱う判断形容詞は量度形容詞の一部であり、かつここでは A2 形容詞に属している。そして、A1 類の形容詞を含む VA 了型は、単純な変化結果のみを表し、過分義は表さないのに対し、A2 類の形容詞を含む VA 了型はすべて過分義を表せるが、単純な変化結果の實現を表せるかどうかは、さらに次の二つの要因で決まるとしている。

【要因(1)】形容詞の語義が何を指しているか？ これには I～IV の 4 種類の区別をたてている。

【要因(2)】動詞の表す動作行為が関連事物（仕手、受け手）に対しどのような制約を加えるか？ これには①～③、3 種類の区別をたてている。すなわち、①指定されない②どちらか一方に指定される。その方向が判断形容詞の判断スケール（p 120）の方向（形容詞ごとに指定されている“指大”“指小”のどちらか）と同じ方向ならば「順方向」とし、逆方向ならば「逆方向」とする。この「順逆」の区別は本稿では【用例表Ⅱ・付表③】（p 157）「動作・行為の方向指定」で検討する。③両方向とも指定する事ができる。どちらの方向かは文脈で決まる。本稿では【用例表Ⅲ】（p 165）で検討する。

上記の諸要因を用いた語義分析の結果は一覧表として整理されている。

【陸論文・一覧表】 [] 内は本稿に拠る注記

		某種結果的實現	預期結果的偏離
V A 1 了 [褒貶形容詞]		+	-
V A 2 了	語義指向 I 語義指向 II	+	+
	語義指向 III IV	不起 制約作用 ①	“買大(小)了, 買長(短)了” - +
		單向制約 ②	順向的 “挖大了, 挖深了,” + +
		非順向的 “挖小了, 挖淺了,” - +	
	雙向制約 ③	“寫大(小)了,” + +	

[要因 (1)]
A 2 的語義指向
I = V 本身
“快慢早晚”
II = V 的施事或受
事移位的距離
“遠近”
III = V 的施事
IV = V 的受事

[要因 (2)]
制約作用
① = 不起作用
② = 單向制約
[順方向]
[逆方向]
③ = 雙向制約

cf. “ ” 内の用例は論文中の例文に使われたものの一部である。

【陸論文一覧表】では、“挖大了”を、“單向制約・順向”(「方向指定・順方向」)の用例とし、“挖小了”を“單向制約・非順向”(「方向指定・逆方向」)の用例とする。穴を掘る動作は必ず穴を大きくする方向性を持ち、その変化に沿った穴の変化すなわち大きくなる方向“大”が動作方向に沿った判断スケールの当て方となるからである。

また、“寫大了”“寫小了”をともに、“雙向制約”のパターンとしている。陸論文の定義では“雙向制約”とは(1)“是雙向的, 而且都是順向的”(双方向を指せ, しかも両方とも順方向である)(2)“什麼時候表示(a)義, 什麼時候表示(b)義, 這取決于上下文語境”(いつ, a 義=單純な変化結果を表すか, いつ, b 義=過分義を表すかは前後の文脈で決まる)である。そこで, (1)の分析は正確には, “寫”のような双方向動作には文脈意義による方向指定がある”すなわち, 「方向指定は存在するものの, 不特定である」(これを以下「方向指定・不特定」と呼ぶ)と解釈できる。しかも, 陸論文の“都是順向的”という分析と挙げてある用例をみる限りでは, ここでいわれている方向指定・不特定とは

「VA 了型内の形容詞の判断スケールの方向が、そのまま動作・行為の方向を示す」ということに等しい。言い替えるならば、補語の位置にある形容詞の語義的意義特徴が述語の位置にある動詞の語義的意義特徴に共起制限を加える、「述語に対する補語優先の共起制限」の存在が認められているのである。さらにまた、判断形容詞にとって判断スケールの方向を示す語義的意義特徴は弁別的特徴であり、示差的特徴でもあるのに対し、“寫”などの動詞にとっては動作の方向性（“寫”の場合、生産物である“字”を大きくするか、小さくするか）は弁別的特徴でもなく示差的特徴でもない。述語となる動詞の意義素内での重要度が低いことも、上記の文法的意義特徴が存在することを裏付けていると言えよう。陸論文での“雙向制約”のVA 了型についての分析(2)には、用例が列挙してあるが、本稿では項(3.11)をあらため、V得A'型への変換可能性(変換リストの【調査Ⅲ】)を通して、その文脈的意義を探ることにする。

さて、本稿では、これまでNVA 了型における「過分義」と「単純な変化結果」とは、判断に用いられた形容詞の判断基準が異なると仮定してきた。すなわち、前者は適正基準、後者は旧態基準を用いて判断をくだすのである。それに対し、VA 了N型の「過分義」はNの常識基準を適正基準とする、という点で、文脈意義によって別に適正基準を付加される必要のある「方向指定・不特定」タイプのNVA 了型の表す「過分義」とは用法を異にしている。また、「単純な変化結果」も、VA 了N型が表す場合とNVA 了型が表す場合とでは、その統合意義が異なっていることがすでに【用例表Ⅱ……動詞の格を担う名詞を本来の位置、動詞の後方へと戻す用例】の調査資料を検討するうちに、明らかになってきていると思われる。

また、陸論文では“單向制約”“雙向制約”を問わず、用例として挙げられたVA 了型内の動詞は、格として生産物格をとるものばかりである。これは要因(1)のうちのⅣ“V的受事”が行為対象格と生産物格に区別されていないこ

とによるが、故意的ではないにしろ、用例を選択して論をたてやすいようにしたとみなされても仕方がないほどの片寄りかたである。以下、考察を進めていくにあたっては、本稿で作成した言語資料をできる限り考察対象に加えて、用例に片寄りがないようにする。

3.8 NVA 了型が表す統合意義（その1）

——行為対象格と「動作・行為の方向指定・順逆」との関連付け、
および【NVA 了型統合意義特徴Ⅳ】の規定——

旧態基準をもとにして形状の変化を表現するならば「(以前) より～になった」という単純変化を示す日本語訳になる。旧態基準とは通常は「同一の物体の時間差のある二つの状態を比較判断する（“很”や重畳形が用いられないことから、描写するとは認められない）ための、旧いほうの状態」のことである。もし、この旧態基準を動詞の現象素の中で状態変化に応用するならば、「平相の状態を判断基準として異相の状態を判断する」という、時点としては同一時点でありながら、事柄の相変化のなかだけでの比較判断を認めることになる。このような比較判断は「VA 了型の統合意義特徴としてのみ存在する」と仮定することができる。そしてもっとも特徴的な、その判断基準を「平相基準」と名付けることにする。平相基準をあらためて定義づけると、次のようになる。

- ① VA 了型のなかでのみ用いられる判断基準、
- ② 平相から異相にわたって存在する事物、すなわち動作主・経験者・当体・行為対象・道具などの平相における状態、

ただし、この平相基準は生産物を生み出す動作行為を表す動詞を用いた VA 了型には使うことはできない。なぜなら、生産物は平相の状態では存在していないからである。

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

そこで、まず、行為対象格をとる動詞と判断形容詞とが組合わさった VA 了型、つまり平相基準が適用できる VA 了型について、「単純な変化結果」を表すとされる統合意義の内容を詳しく検討していくことにする。最初の考察対象は、さきに【調査Ⅱ】についての資料として挙げた【用例表Ⅱ……動詞の格を担う名詞を本来の位置、動詞の後方へと戻す用例】(p 143)の中から、一対の判断形容詞のうち、片方だけが VA 了 N 型で使われる [VA 了] の用例を取りだした、用例一覧表(【用例Ⅱ・付表③……方向指定・順方向】)である。これらの [VA 了] にはすでに【用例表Ⅱ】において、「動作方向」のパターンとして「方向指定」とだけマークをつけておいた。(ただし“墊薄”だけは「逆方向」の例として項目にもたててある)

【用例表Ⅱ・付表③……方向指定・順方向】

動作方向	【調査Ⅰ】		【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】		
	NVA了型		VA了N型		V得A'型		A'地V型		
方向指定	V厚	N	V薄	V厚	V薄	厚	薄	厚	薄
	墊厚	鞋底	○①	○	×	很重	很重	很重	很重
方向指定 (逆方向)	V薄	N	V厚	V厚	V薄	厚	薄	厚	薄
	墊薄	褥子①	○	○	×	很重	很重	×	重
方向指定 方向指定	V大	N	V小	V大	V小	大	小	大	小
	放大	這張照片	○②	◎	×	很重	很重	×	×
	開大	你							
		把窗戶	○③	◎	×	很重	很重	×	×
方向指定	V大	N	V小	V大	V小	大	小	大	小
	張大	他愛人							
	嘴	○④	◎	×	很重	很重	很重	×	

注釈①②③④すべて「基準とする厚さ・大きさ」に比べて「～が足りない」というマイナス値を表す。

【用例表Ⅱ・付表③】にリストアップされた NVA 了型から認められる顕著

な共通点は、2点ある。

(1) 動作の一定方向に逆らった判断スケールをあてた [VA 了] (注釈①②③④) の場合、すなわち“墊薄了”“放小了”“開小了”“張小了”の場合、「動作の一定方向（ここでは厚くなる、大きくなる）への進み具合が足りない」という意味での「マイナス値」を表していることである。日本語の「～すぎる」という表現と比べてみると、薄すぎるとか、小さすぎるとかいうニュアンスには、もちろん時にはこういうマイナス値にさらに過分義も含まれるであろうが、判断基準が厚さや大きさを求めているという文脈意義が特に加えられていない場合には、「薄さを求めているが、それにしても薄すぎる」とか、「小さいのはいいのだが、それにしても小さすぎる」というプラス値の過分義を表すといえよう。日本語で単なるマイナス値やプラス値を表す場合は「少し厚めだ」などが使われるのではないか。それに対し、中国語の [VA 了] のうち、「方向指定・逆方向」が表す統合意義特徴は、「統合意義特徴だけに限ってみると、プラス値よりもマイナス値（不足分）を表す率の方が高い」といえる。

(2) 動作の一定方向に沿った判断スケールをあてた [VA 了] の場合、すなわち“墊厚了”“放大了”“開大了”“張大了”の場合、VA 了 N 型に挿入されたとしても、その統合意義特徴を完全に抑圧してしまう、即ち過分義を抑圧してしまい、VA 了 N 型全体の統合意義を単純な変化結果を表すものにする。このような VA 了型（方向指定・順方向）に認められる【単純な変化結果を第一義として優先する】という統合意義特徴は、動作の方向性を動詞によって単に「方向指定」するだけの VA 了型には無いものであり、ここで新たに「定方向指定」という、VA 了 N 型への変換を通して見いだされた VA 了型のパターンを新たに設定する必要があると考えられる。インフォーマントの内省報告が「単に変化したというよりは、物体を然るべき厚さ、然るべき大きさにした」と言っていることも、「定方向指定」という VA 了型の文法的特徴が VA 了 N 型の統合意義特徴と呼応した結果（統合意義）を示すと見なせるで

あろう。

「定方向指定」という統合意義特徴が適切に設定されたものであるかどうかを確認するために、「方向指定・順方向／逆方向」を表すVA了型で、かつその動詞の後置格が行為対象格である用例を比較対象としてとりあげ検討する。

中国語では散髪に関するVA了型がいくつかあるが、ここでは“剪（頭髮）”“理（髮）”と“長／短”を検討対象としてとりあげる。これらの用例は「短リスト」のなかで【調査Ⅰ～Ⅳ】を通して異なる用法を示している。この用法の違いはプラス値とマイナス値が過分義とどう関わるか、またVA了型の統合意義特徴が類義語グループによってどう使い分けられるか、という検討対象とするにふさわしいと思われる。

【散髪に関するVA了型】

		【調査Ⅰ】		【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】	
		NVA了型		VA了N型		V得A'型		A'地V型	
定方向 指定	V長	N	V短	V長	V短	長	短	長	短
	留長	她的頭髮	○	○	×	很重	很重	××	××
定方向 指定	V短	N	V長	V長	V短	長	短	長	短
	剪短	她							
		把頭髮	×?	×	◎	很重	很重	××	×重
	理短	（禁止表現	○	×	×	××	很重	××	××

まず、本稿の3人のインフォーマントの内、2人（蔡，楊両氏）は最初“頭髮剪長了”を使わないと報告した。その後，“剪長一些”なら自然な表現だと回答があった。この「VA + 数量表現」統合型は、以前の数値より、または他のものより～めにVしてほしいという要望を表す表現であり、その統合意義特徴のうちに、「旧態基準または具体基準と比較して判断をください」という弁別的特徴を含む形式である。つまり、髪を切っていく方向とは逆方向の判断スケールを持つ“長”はVA了型の統合意義特徴（＝平相基準と比較する）とは排斥しあうものの、「VA + 数量表現」の統合意義特徴（文脈意義として加

えられた比較のための判断基準と比較する)は共起しやすいということである。

このように報告に揺れが最後まで残る場合は、その原因を一つ一つ探る必要があるが、やはり“理頭髮”と“剪頭髮”との用法の違いをどう捉えているかに主な原因があると考えられる。“理頭髮”では“NV短了”の形式も“NV長了”の形式も成立するからである。外語教學與研究出版社1984《漢語動詞—結果補語搭配辭典》，も“理”の項目に“頭髮～短(～長)點兒”を用例として載せているが“剪”の項目では“頭髮剪短了”を載せているにも関わらず“剪長”の形式の用例には一つも触れていない。類義語や類義形式の語義・用法の分布には個人差があるのが常であり、その個人差の中から、やがて絶対的多数を占める語義・用法が生まれていくと考えられる。しかしここでは、統計上の結論は棚上げにして論を進めていく。

まず“理頭髮”は離合詞“理髮”と同様の用法を持つと考えられるべきであろう。したがって、VN型の中へ形容詞を結果補語として挿入することは、VN型全体で「散髮する」という行為範疇を表す固定形式としての制限によって排除されてしまい、不可能である。目的語“(頭)髮”が主語として前置され、離合詞としての固定形式が分解変形された場合に限り、述語として独立した(N)VA了型が成立すると考えられる。語義的には“理髮”は男性によく使われ、“剪頭髮”は男女兼用という違いも存在する。

つぎに“剪長了”がVA了型の統合意義特徴である平相基準だけでは使いきにくいことを更に検討してみる。

例えば、“長頭髮剪短了”の単文内では“剪短了”が単純結果のみを表し、過分義が消滅することが、岩崎皇1990「動補文における比較の二類型—過分義現象をめぐる—」中国語学237, pp 71-81に指摘されている。本稿のインフォーマント全員の語感では、この表現はロングヘアとショートヘア“短頭髮”というヘアスタイルの変化を表す(ロングヘアをショートにした)だ

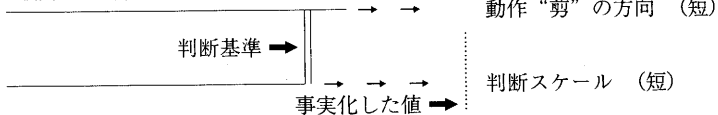
判断形容词と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

けで、具体的に何センチ短くしたという具体的動作や過分義とは無関係になる。岩崎論文での解釈どおり、平相において形状の特徴があらかじめ指定されていたことが原因とみなしてよいであろう。また、岩崎論文では“短髪剪長了”も過分義として成立すると認めている。ところが、本稿のインフォーマントの語感では、“短髪剪長了”でさえ①ショートヘアがカットし足りない②ショートヘアを長めに切った（前回のカットを修正した）のどちらの意味としても成立しなくなる。中国語で①②の意味を表現するには、①“短髪（這次）剪得很長”“短髪剪得（比以前）長一點兒”②“把短髪換成長髪”という別の統合型を用いる。この原因は判断基準の区別だけでは説明できない。

そこで次に考えられるのは、さきに述べたような NVA 了型内の判断結果の下し方が、文脈意義として付加された具体基準（主語に置かれた“長髪”“短髪”）と共起制限を加えあっているかも知れないということである。動作の方向、判断スケールの当て方、およびその結果のプラス値とマイナス値ならびに適正基準の設定と過分義との関係を図解すると次のようになる。

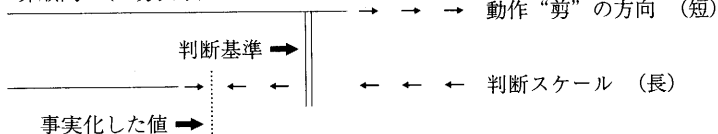
【VA 型内の動作方向、判断スケールの当て方、判断結果の関係図】

1) “順向” (=剪短了)



- 判断基準が「適正基準」以外＝プラス値
基準適合値に到達することが可能（通過することができる）
＝単純な変化結果を表示できる
- 判断基準が「適正基準」＝過分義（プラス値）
基準適合値へもどすのは“剪”の動作と逆方向で不可能
すなわちプラス値となった後では修正そのものが不可能。

2) “非順向” (=剪長了)



- 判断基準が「適正基準」以外＝マイナス値
基準適合値に到達することが不可能（つねに不如意）
＝単純な変化結果を表示できない
- 判断基準が「適正基準」＝過分義（マイナス値）
基準適合値へもどすのは“剪”の動作と順方向で可能
すなわちマイナス値となった後でも修正行為そのものは成立する。
しかし判断スケールが“剪”の動作と逆方向でミスマッチであり，“剪長了”という統合型では表示できない。他の統合型を用いて表す。

この関係図から推定できることは、(N) VA 了型が表す変化がいかなる方向（動作方向と同じでも反対でも）に向く場合でも、その統合意義だけでは「判断基準として設定した基準値にむけての修正」を表すことがないということである。「単純な変化結果」を表すとされる場合も、「ある状態経過の一通過時点で基準値に到達した状態」として表示されているのであって、単に判断基準が適正基準として設定されていなかったために、過分義が生じないにすぎない。しかも判断基準の基準適合値どおりになった状態は原則として“V 好了”で表示されるとみてよい。

こう考えてくると、日本語では「ショートヘアを（今度は）長めに切った」という修正を表す表現が抵抗感なく成立するのに対し、中国語では(N) VA 了型で同じ状況を表現できないために“短頭髮剪長了”が成立しないと解釈できよう(17)。

そこで NVA 了型の統合意義特徴として次のものを加えることにする。

【NVA 了型統合意義特徴Ⅳ】（動詞が方向指定特徴を持つ場合）

その判断形容詞が使う判断スケールが、動作方向と逆方向である場合は、その判断基準の基準適合値に比べて必ずマイナス値を示すことになる。しかも、VA 了型では基準適合値に向けての意図的な修正による変化は表示することができない。

判断形容詞が使う判断スケールが動作方向と順方向である場合に限り、

- ①基準適合値に到達したこと②基準適合値を超過したプラス値も表示でき

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析
る。また、基準適合値に向けての修正行為そのものが不可能であり、いかなる形式でも表現できない。

3.9 NVA 了型が表す統合意義（その2）

——生産物格と「動作・行為の方向不特定・順方向」との
関連付け——

NVA 了型内において生産物格を求める動詞が、先に分析した行為対象格を求める動詞と異なるのは次の点である。この文法的事項は陸論文から見通せる。

動詞の語義的特徴として動作の方向が指定されていないため、NVA 了型内で共起する形容詞すなわち結果補語となった形容詞の判断スケールの方向に、動作の方向が定められる。したがって、その一つ一つの [VA 了] の用法を個別にみれば、すべて方向指定かつ順方向である。また、判断基準として [VA 了] 内の平相基準を用いることができない。[VA 了] 外の文脈意義が表す判断基準（行為対象格の場合と同じ）を用いる。

さて、ここで本稿での言語資料を通観してみると、形状を表す判断形容詞と行為対象格をとる動詞を NVA 了型のなかで用いた場合に、しばしば主語となる名詞があたかも生産物を表すような統合が目につく。例えば“切”は行為対象格をとり“切肉”（肉を切る）などの常用 VN 型で使われる。しかし、切った結果の“肉片”が“長・短／厚・薄”，“肉塊”が“大・小”という形状に特に関心が寄せられることから“肉片切長了”や“肉塊兒切大了”という NVA 了型が成立する。インフォーマントの内省報告のなかでも，“木板”（材木）にはまず“鋸長了”，“木頭”（素材としての丸太）には“鋸厚了”の組み合わせがいちばんふさわしく思えるという語感が述べられていることが、その裏付けとみなせよう。すなわち、VN 型においてははもともと行為対象格を求める動詞

であっても、NVA 了型のなかでは、その主題となる N に対して①具体的な行為対象となる物体の一部から取り出された物体、または具体的な行為対象となる物体で構成された物体②形容詞 A が表す形状について、常識的に注目され易い物体、という語義的意義特徴をつけ加えとえられる。これは「行為対象格の疑似生産物格への変換」という統合意義特徴が NVA 了型のなかで発揮されているとも言ひ替えられる。そこで【形状を表す判断形容詞・文法的特徴Ⅱ】(Iは p138)として次の特徴を設定する。

【形状を表す判断形容詞・文法的特徴Ⅱ】

ある動作 V の行為対象となる物体について、「その一部分」または「それを材料として構成された物体」を表す名詞 N を主題として前置して、それに動詞 V の疑似生産物としての格を担わせるという統合意義特徴を、NVA 了型のなかで表すことができる。

この文法的特徴の存在を裏づけるために、【用列表Ⅲ……動作方向不特定を生み出す統合意義特徴】を作成し、その中の主語の名詞が「生産物格」を担う(=動詞がもともと生産物格を求める)場合と、「疑似生産物格」を担う(=動詞が本来は行為対象格を求める)場合との用法に大差がないことを確認する。なお、【用列表Ⅲ】を【用列表Ⅰ】(p132)と比較すると、【用列表Ⅰ】の「一対の形容詞のうち、片方しか VA 了型に入らない用例」すなわち動作方向指定の文法的特徴を持つ用例において、主語の名詞と動詞との本来的格関係が、すべて「行為対象格」であることが確認できる。このことも、動作方向を不特定にする要因のひとつに、NVA 了型内の動詞と名詞とが「生産物格」の関係をむすんでいることを裏付けるといえよう。

動詞の表す行為そのものについての語義的特徴「動作方向不特定」に注目するならば、【用列表Ⅱ……動詞の格を担う名詞を本来の位置、動詞の後方へと戻す用例】(p143)つまり VA 了 N 型へ変換できる NVA 了型のなかの【VA 了】にも、その用例が含まれる。しかし、NVA 了型全体に関わる、形状を表

判断形容詞と動詞とが合わさった統合型の統合意義特徴の分析

す判断形容詞の文法的意義特徴だけを主に分析しようとするならば、【用例表Ⅰ】はもちろん【用例表Ⅱ】にも採録されていない用例のみを検討対象とする方法をとってもよいであろう。

そこで【用例表Ⅲ】の中のNVA了型には【用例表Ⅰ・Ⅱ】の中のものも再録していない。VA(了)N型への変換ができず、VA(了)N型の統合意義特徴と呼応できないものばかりである。

【用例表Ⅲ】の表外につけてある【名詞が担う格】のマークは「当体＝当体格」「生産物＝生産物格」「疑似(生産物)＝もと行為対象格」を表す。なお、比較対照しやすいうように、動詞ごとに用例をまとめた。また、“買大／買小”については、陸論文でも“V所表示の行為動作對與之相關的事物所具有的性質，不起制約作用”として“單向”(動作方向指定)または“雙向”(不特定)などの制約が全く無いグループとして別に一類をたててある。(【陸論文一覽表】p154参照)本稿でもその特殊な統合意義について後述する。

【用例表Ⅲ……動作方向不特定を生み出す統合意義特徴】(★は動詞“切”の例)

【名詞が担う格】	【調査Ⅰ】		【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】			
	NVA了型		VA了N型		V得A'型		A'地V型			
	N	粗細	V粗	V細	粗	細	粗	細		
当体	變粗	腿	○	×	×	很重	很重	×	×	
当体	變細	腰	○	×	×	很重	很重	×	×	
生産物	N	厚薄	V厚	V薄	厚	薄	厚	薄		
	擀厚	(禁止)								
生産物		(餃子皮兒)	○	×	×	很重	很重	×	重a	
	擀薄	餃子皮兒	①	×	×	很重	很重	×	重a	
生産物	烙厚	這張餅	○	×	×	很重	很重	×	重b	
生産物	烙薄	餅	①	○	×	×	很重	很重	×	重b
疑似	切厚	肉片	②	○	×	×	很重	很重	很重	
疑似	切薄	這種喫法								

【名詞が担う格】	【調査Ⅰ】		【調査Ⅱ】		【調査Ⅲ】		【調査Ⅳ】		
	NVA了型		VA了N型		V得A'型		A'地V型		
	N	厚薄	V厚	V薄	厚	薄	厚	薄	
	把肉(片)	○	×	×	很重	很重	很重	很重	
疑似★	切大	這土豆丁	小○	×大	×小	很重	很重	×c×d	×c×d
疑似(18)	糊薄	這種紙盒③	○	×	×	很重	很重	×重	×重
疑似	攤薄	(命令)							
		把雞蛋	○	×	×	很重	很重	很重	很重
疑似	削薄	(命令)							
		把蘋果皮	○	×	×	很	很重	××	很e重e
生產物	N	大小	V大	V小	大	小	大	小	
	編大	你							
		把筐	○	×	×	很重	很重	×	×
生產物	搭大	這個棚子④	○	×	×	很重	很重	×	×
生產物	搭小	臨時舞台	○	×	×	很重	很重	×	×
	量小	你							
(対象?)		把大衣	○	×	×	很重	很重	×	×
疑似	釘大	這包裝箱⑤	○	×	×	很重	很×	×	×
生產物	縫大	針脚 ⑥	○	×	×	很重	很重	×	×
疑似	改小	這件衣服	○	×	×	很×	很重	×	×
生產物	蓋小	房子	○	×	×	很重	很重	×	×
疑似	捆大	你的行李	○	×	×	很重	很重	×	×
対象	買大	這雙鞋 ⑦	○	×	×	很重	很×	×	×
対象	買小	這雙鞋	○	×	×	很重	很×	×	×

【調査Ⅰ】注釈

①餃子皮兒擀厚點兒！(命令表現としてなら成立しやすい。)

【調査Ⅳ】注釈

重a ～～地擀了一張餃子皮兒。

重b ～～地烙了一張餅。

×c 把西瓜很～地切成幾塊。(名詞を“西瓜”に替えると使える)

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

- × d 把西瓜～～地切了一塊。(名詞を“西瓜”に替えると使える)
很 e 重 e ～～地削下來。
～～地削掉一塊。

【原用例】

- ①餅烙薄一點兒好喫還是烙厚一點兒好喫？／這張餅烙厚了，里邊沒熟。
- ②肉片切厚了，應該再切薄點兒。
- ③這種紙盒不要很結實，糊薄一點兒就行了。
- ④這個棚子再搭大一點兒，完全可以住人。
- ⑤這個包裝箱釘大了，貨物放進去來回逛蕩。
- ⑥針腳縫大了，顯得針綫活太粗。
- ⑦這雙鞋買大了，能給換一下嗎？（買ったけれど大きすぎた，……）

上記【用列表Ⅲ】から見いだされる注目すべき不斉合は2点のみであり、語義的意義特徴の違いによるものとして解釈できる。

(1) 名詞が担う格が例外的に「行為対象格」のままである表現“買大／小了”については、「買い物に関する社会的な関心」が一種の固定イデオムを形成しているものと考えられる。“買”を使った同種の表現としては、①買った品物の「形状に関する適正基準」と比較する，“買大／小了”“買長／短了”②買った品物の「値段に関する具体基準」と比較する“買貴／便宜了”“賣貴／便宜了”が存在する。

①のグループの表現を V 得 A' 型へ変換する場合、人間の日常的な行動パターンを表現する統合意義を示せるようになる。“她買鞋總是買得很大。”（いつも大きめの靴を買う）李臨定 1988《漢語比較變換語法》中國社會科學出版社 pp 153-165 でも、個別の品物を買った場合に“把”字句の統合型へ変換できないこと、個別の品物を主語とした“被”字句でも使われにくいとの指摘がある。②のグループの表現を使うには、どこの売り場のことか、どこと比較しているのかなどの、やはり買い手や売り手としての行動パターンに注目する情報が、文脈上または場面上、明らかにされている必要がある。例えば“這兒賣得比城里便宜”などである。

したがって、動作“買”そのものに方向指定そのものが存在しないことと、

“大・小”“貴・便宜”などが個別の物体の形状の変化や値段の変化を表わしていないことが明かであるので、NVA 了型としては例外の表現すなわち、固定イディオムとみなしてよい。

(2) 【調査Ⅳ】すなわち A' 地 V 型への変換が可能かどうかの調査結果について、形状形容詞“厚・薄”と“大・小”の間ではっきりとした違いがみられる。前者の用例はすべて変換可能であり、後者の用例はすべて変換できない。【調査Ⅰ】～【調査Ⅲ】までは同じ変換パターンを示しているのにも関わらず、【調査Ⅳ】に関してだけ違いが出ているのは、“厚・薄”と“大・小”の意義素が何かの部分で A' 地 V 型の統合意義特徴との統合について異なる共起制限を起こすことを示している。この点については、次項 3.10、で検討する。

3.10 A' 地 V 型の統合意義特徴および判断形容詞の意義素について、 【調査Ⅳ】が与える情報の検討

A' 地 V 型内の形容詞が判断形容詞 A に描写的特徴が加えられた形式“很 + A”または“AA”である場合、その統合意義特徴を拙稿 1996. p 45 では次のように規定した。

【A' 地 V 型統合意義特徴Ⅰ】（アンダーラインの箇所は主な訂正箇所）

動作主がある動作を行うにあたり、動作の異相・流相に対するプランのたてかたを形容詞で評価・判断する。

“很”A 形は異相（到達する様相）に対する意志、AA 形は流相（動作のやり方）に対する意志を、評価対象・判断対象とする。

この規定を本稿では、拙稿 1995. 1996. での考察を再検討してより厳密なものとして、以下のように訂正する。

【A' 地 V 型統合意義特徴Ⅰ】

動作主がある動作 V を行うにあたり、動作の異相・流相に対してたて

判断形容詞と動詞とが合わさった統合型の統合意義特徴の分析

たプランが事実化された時点での状態を、第一人称者が「描写形容詞としての文法的意義特徴（以下「描写特徴」と呼ぶ）」を付加された判断形容詞、すなわち“很”A形とAA形を用いて詳述する⁽¹⁹⁾。A'地V型における両者の描写特徴の違いは、まず描写対象の違いとして現われる。

“很”A形は動作主が目的意識をもって設定した「ある事物の異相で到達すべき状態」を描写対象とし、AA形は動作主が積極的な意志をもって設定した「流相での動作のやり方に関する方向性」を描写対象とする。

さて、この統合意義特徴と“厚・薄”“大・小”との共起制限を見いだそうとしても本稿の言語資料の数量では立論できない。次に“V厚・V薄”“V大・V小”の中の動詞との組みあわせにA'地V型をこぼむ要因があると仮定するならば、ある動作Vを通してある事物の異相で到達すべき状態Aを達成することができない、またはある動作Vを行うときにAの判断スケールと同じ方向性を持つ行為が意志的にできない、という共起制限がその要因となるはずである。けれども、【用例表Ⅲ】の注釈のうち【原用例】⑤這個包裝箱釘大了、(この包装用の箱は釘で打ち付けて作ったが大きすぎた)貨物放進去來回逛蕩。を例にとると、包装箱を釘で打ちつけて作る際に、大きく作ろうという意志を持ったり、小から大へと作りながら箱の形状を変えることは比較的簡単なことと思われるのに、“大大地釘了(包装箱)”という表現がなりたたない。そこで、A'地V型という統合型を動詞の目的語N'にまで拡大した「動作主+A'地V+N'」として考察してみる。そして【調査Ⅳ】注釈の用例を始めとして、本稿の言語資料で「動作主+A'地V+N'」の統合型での用例に共通するN'に関する特徴を探ってみると、以下の2点がみいだされる。

(1) N'が「NVA了型内のN」と等しい場合、必ず数量表現(原則として「一」+量詞)によって限定修飾が加えられ、「指示機能・不定」という文法的特徴を持つ。このことはN'が動作の生産物とみなされていることを示す。また、N'に関する「A了」という形状変化の判断方法は主に2通りある。

①同一動作の繰り返しを通観して、その間の形状変化を判断する。

②触覚で判断できる個体の形状変化ではなく、視覚を介した「平面上の占有スペース」の変化として判断する。(代表例【用例表Ⅱ・付表①】(p 146)の“寫大”“寫小”“畫小”)

(2) N'が「NVA了型内のN」と異なっている場合は、N'は「Nの不定の一部」であり、全体を表すNに対して部分を表すN'にだけ「A了」という形状変化が生じる。また、加えられる動作Vは主に「切り離し、分離」を促進するものである。

この2点の特徴は先に規定した【形状を表す判断形容詞・文法的特徴Ⅱ】(p 164)の存在を裏付けるものであり、さらにA'地VN'型の統合意義特徴として数えるべきものと考えられる。

しかし本稿ではまだ、①上記のNとN'の相関関係、②平面上の占有スペース(2点間の距離を含む;視覚を介して計る数量)と立体的占有スペース(個体の大きさを含む;視覚を介して計る数量)との相違点、などについて別個の調査を行っていないので、問題提起に止めておく。

最後に角度をかえて、“大・小”がA'地V型へ変換できる用例が【用例表Ⅰ,Ⅱ】にあり、A'地V型へ変換できない用例が【用例表Ⅲ】にあることに注目してみる。そうすると、VA了N型に変換できるほど、Nにとって“大・小”が弁別の特徴であること、重要関心事である場合に限り、A'地VN'型へも変換できることがわかる。このことは“大・小”が“厚・薄”に比べて語義の広がりが大きいため、「生産物にとって大きさという属性が重要な関心事となる」という統合意義特徴をA'地VN'型内でも求められることを表わすと考えられよう。

3.11 V 得 A' 型の統合意義特徴と NVA 了型の「過分義」との
共起関係について、【調査Ⅲ】が与える情報の分析
——形状形容詞とスペース形容詞に共通の用法例——

以上、検討してきた統合意義特徴および形状を表す判断形容詞の文法的特徴は、“高・低”“寛・窄”“深・浅”の3対の形容詞についても大部分が適用できるものと考えられる。この4対の形容詞は、これまで分析対象としてきた、形状形容詞“長・短”“粗・細”“厚・薄”“大・小”と同様に「触覚を介して物体の形状を判断する」という語義的意義特徴を持っているからである。

しかしながら、“高・低”“寛・窄”“深・浅”の3対の形容詞は、形状形容詞に比べて、次の語義的意義特徴が弁別の特徴として、その用法において、より重要な働きをすると考えられる。

判断対象＝平面上または立体内のスペース

判断方法＝距離として面積として容積として、視覚を介して判断する

そこで、以下これらの形容詞を「スペース形容詞」と呼ぶ。

もちろん、先の4対の形状形容詞にもこの語義的意義特徴は大なり小なり存在していて、【用例表Ⅲ】における“大・小”がA'地V型で使えなくなる用例は、すべてこの「スペース」を判断対象とするものといえる。しかし、少なくとも、NVA 了型内における用法で、弁別の特徴として、やはり触覚を介して物体の形状を判断する方法が主流を占める点で、形状形容詞はスペース形容詞と一線を画すものである。

本稿で収集した言語資料では、「VA 了型における動詞と形状形容詞とが過分義を表すようになるための文脈意義」が、同様にスペース形容詞にも適用できることが示されている。たんに【VA 型変換表】の用例を列挙するだけでもその証拠とすることができる。しかし、【調査Ⅲ】をいまだ活用していないこ

ともあり、最後に形状形容詞とスペース形容詞とを補語に用いたVA了型と4種類のV得A'型とが、文脈意義によって付加された過分義の表現について、各々どのような対応表現をもつかを例示する。そして、形状形容詞とスペース形容詞がVA了型とV得A'型における用法に共通点をもつことを明らかにすることにより、両者に共通の文法的意義特徴が存在することを示したい。

調査対象とした例文は、陸論文が「“雙方向”のVA了型は文脈によって、単純な変化結果と過分義とが決定される」として挙げた用例である。使われている形容詞は“早”(時間)“遠”“深・浅”(スペース)“長・短”“大・小”“高・矮”(形状)である。その用例中のVA了型(アンダーラインを付けてある)を4種類のV得A'型へ変換できるかどうかを調査した結果を、【V得A'型への変換パターン】として以下に挙げる。数字は陸論文での挙例順を示すが、検討を加え易いように、文脈上、単純変化(常に順方向である)を示すグループを二重線の上に、過分義を示すグループを二重線の下にわけて整理してある。【マーク】の符号は「単=単純変化」「過=過分義」を表す。以下、本稿の3.7での定義を採録しつつ凡例を述べる。

まず、単純変化は動詞の方向と判断形容詞の判断スケールの増量方向が一致している場合に表せる統合意義である。その動詞は方向指定のものもあるし、方向が不特定のものもある。変化結果としては判断基準(適正基準ではない)を過ってオーバーしていくプラス値「+」と判断基準に到達していない変化を押し進めて、その変化に修正をかける「修」を区別する。「修」はV得A'型によって表される。(VA了型ではマイナス値にとどまる。)

過分義のなかの区別としては、適正基準をオーバーしたのものには「+」(つまり動詞の方向指定に対し、判断形容詞の判断スケールの増量方向が順方向)、適正基準に不足しているものは「-」(動詞の方向指定に対し、判断形容詞の判断スケールの増量方向が逆方向)をつけた。

(了)は語気助詞があってもなくてもよいことを示す。V得太A(了)形は、

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

「過文義」を弁別の特徴とすることが、一見してわかる。

14, 15, 19 の用例は、V 得很 A 形 V 得 AA 的の用法に食い違いがある用例。文脈意義として「要求」を含むという特徴がある。

なお、この調査は2回めのチェックでインフォーマントの意見が一致した。

【V 得 A' 型への変換パターン】

	V 得 很 A	V 得 太 A	V 得 A 了	V 得 A A 的	マーク
1 過去他老遲到, 最近他來早了.	○	×	○	○	単・修
③ 他慢慢地走遠了, 消失在人群之中.	×	×	×	×	単・+
⑥ 那孩子幾年不見就長高了.	×	×	×	×	単・+
8 那幾根竹竿兒按你的要求已鋸短了.	○	×	×	○	単・修
9 爲了防止小偷進院子裏來, 他又把院牆壘高了.	×	×	×	○	単・修
13 那山洞洞口已按要求挖大了.	×	×	×	○	単・修
15 你要求我挖的坑已經挖深了, 你看合不合要求.	○	×	×	×	単・修 (要求)
19 那題字我已經按你的要求寫大了, 看行不行.	○	×	×	×	単・修 (要求)
20 那“龔”字好難寫, 寫了好幾遍才把它寫小了.	×	×	○	×	単・修
21 你那個字寫大了而這個字寫小了, 都要再重寫一遍.	○	(了)	○	○	単・+ 単・+
2 你來早了用不着那麼早來.	×	了	○	×	過・+
4 這次你又走遠了, 再往這邊走幾步.	×	了	○	×	過・+
5 那水仙花的葉子長高了, 會影響開花.	×	(了)	○	×	過・+
7 這一根鋸短了, 只好報廢了.	×	(了)	○	×	過・+
10 那牆壘高了, 得拆掉四層磚.	×	(了)	○	×	過・+
14 那山洞洞口挖大了, 要是能挖小一點兒就好了.	○	(了)	○	×	過・+ (要求)
16 你那個坑挖深了, 只須挖 80 cm, 現在有 90 cm 了.	×	(了)	○	×	過・+

	V得 很A	V得 太A	V得 A了	V得 AA的	マーク
11 那根竹竿兒 <u>鋸長了</u> ，環得鋸掉 3 cm.	×	(了)	○	×	過・ー
12 那牆 <u>壘矮了</u> ，環得加四層磚。	×	(了)	○	×	過・ー
17 你那個坑 <u>挖小了</u> ，再挖大點兒。	×	(了)	○	×	過・ー
18 這個坑 <u>挖淺了</u> ，再往深里挖 10 cm.	×	(了)	○	×	過・ー

この表から VA 了型から 4 種類の V 得 A' 型への変換を左右する要因，すなわち「この形式があれば変換できない，この文脈意義があると変換できない」という条件を抜き出すと，次のようになる。

【V 得很 A】①副詞“又”②副詞“才”③明確な貶義を表す文脈

【V 得太 A】①明確な単純変化だけを表す文脈

【V 得 A 了】①副詞“已經”

【V 得 AA 的】①副詞“才”②明確な貶義を表す文脈③断定を下せない文脈
(条件描写や疑問点を提起し，文を続ける)

4 つの統合型すべてが NVA 了型から変換をはばまれる (表中 4 つの統合型すべてに×マークがつく) 要因は，

「動作行為が長期にわたることを示す文脈」

である。用例番号③⑥の“慢慢地”“幾年不見”の表現がそれである。

このことは先に指摘した【“V 得”の文法的意義特徴】の存在を裏付ける。

【“V 得”の文法的意義特徴】

「V 得」は事柄を示すにとどまり，動詞の表す弁別の特徴以外は表示しない形式であるために，「弁別の特徴以外の特徴を特に必要とするような動作」を指示できない。

以上の分析のごとく，形状形容詞とスペース形容詞とは VA 了型から 4 種類の V 得 A' 型への変換に関して同様の文法的振舞いを示す。このことは，両者に幾つか共通の文法的意義特徴が存在していることを示す証拠の一つと考えられる。

4.0 おわりに

判断形容詞の範疇のなかで、“量度形容詞”として形状形容詞と一括視されているスペース形容詞、時間形容詞についても、本稿と同様の言語資料と分析方法を用いて、その文法的意義特徴と語義的意義特徴とを明らかにしていく予定である。その過程で、本稿ではまだ分析対象として取りあげなかった【調査Ⅲ】【調査Ⅳ】の資料が活用され、V得A'地V型の統合意義特徴に関しても新たな知見を得られるものと予測している。

1 朱德熙 1956「現代漢語形容詞研究」《語言研究》第一期

本稿にいう判断形容詞とは、この論文で提起された「性質形容詞」と「状態形容詞」という形容詞2分類のうち、性質形容詞に相当するものである。

また、本稿で扱う4対の判断形容詞は、さらに陸儉明 1989「説量度形容詞」《語言教育与研究》第3期 pp 46-59における「量度形容詞」のグループに属する。量度形容詞には、本稿の4対の形容詞の他に“高・低”“深・浅”“遠・近”“快・慢”“早・晚”“重・輕”“貴・賤（便宜）”“多・少”の8対が含まれる。陸儉明による量度形容詞の定義は次のとおりである。

量度形容詞都是成對的，可分為相對的兩組，一組是往大里說的，為a組，以下用Aa表示，一組是往小里說的，為b組，以下用Ab表示。

我們測定量度形容詞的標準是，看能否出現在下列表示偏離的格式里：A+(了)+表示定量的數量詞

能出現在這個表示偏離的格式里的是量度形容詞，否則便不是量度形容詞。

凡Aa進入這一格式，都表示過量；凡Ab進入這一格式，都表示不及。

2 大滝幸子 1975「中国語の形容詞の意味分析」『中国語学』222号

この論文では、“高，低，矮”“亮，黑，暗”について「判断対象」「判断方法」「判断結果」という意味の事項ごとに意義特徴を検討する方法に拠って、意義素記述を行った。また、“燙，熱，温和，暖和，涼快，涼，冷，寒冷”については「知覚（生じさせる）原因」「知覚部位」「知覚程度（5段階）」「快不快」という意味の事項をたてて意義素記述を試みた。なお、温度形容詞の意義素記述についての先行

研究として次の論文を参考にした。

国広哲弥 1967 「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」『構造的意味論』三省堂 pp 8-22

- 3 国広哲弥 1982 『意味論の方法』大修館書店, pp 25-31

「語の意味としては同一言語内の他のすべての語と区別するのに必要にして十分な特徴だけを認めればよい」という立場から記述される意義特徴。

ただし、国広氏自身の意義素観ではこの弁別の特徴の扱いが次のように規定されている。

「大多数の人々に共有されている」という基準で意義素を抽出する。その外側の限界を「弁別的」という基準で決めることには問題がある……意味というもの弁別性というような機能面に限らず、われわれがある語を使用する際に喚起される心的内容という面から捕らえたい……したがって外側の限界を決める基準は……“relevant”〈関連のある〉という特徴であることになる。」(p 54)

なお、本稿では中国語名詞の弁別の特徴を表す判断形容詞が存在する場合は「その判断形容詞は構造助詞“的”を介さずに直接名詞に前置することができる。」ものと仮定する。

- 4 本稿では動詞に後置される形式が担う、動詞の格を以下の17格とする。各々“ ”のなかにその格を担う名詞を目的語とした述語目的語統合型の例を挙げておく。

行為対象“喫飯”，精神対象“認識他”，生産物“做飯”，思考内容“想辦法”，行為原因“躲雨”，精神原因“後悔辭職”，場所（ゴール）“來北京”場所（通過）“走馬路”，場所（スタート）“出門”，場所（存在）“在那兒”，道具“捆繩子”，行為目的“跑買賣”，行為類別“寄掛號”，動作主資格“踢中鋒”，使役“端正學生”，当体“下雨”，同定基準“象爸爸”

精神活動を表す動詞の格を、動作動詞の格と別にわけた点が従来の分類と異なっている。これらの格を「動詞の第一次格」と呼ぶ。

- 5 大滝幸子 1993 「人間を形容する形容詞の意義素記述」における日中対照研究『明海大学外国語学部論集』第5集

形容詞の格（すべて形容詞に前置される）として、判断（評価）対象格、描写対象格、経験者格、原因格の併せて4つの格を認めた。

- 6 中村雄一郎 1979 『共通感覚論』岩波現代新書 27

吉村浩一 1996 「視覚と触覚—変換視野への知覚順応で変化するもの—」『金沢大学文学部論集・行動科学科篇』第16号

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

五感の中樞に位置して、支配的機能を発揮する感覚が触覚的なものか視覚的なものについての議論には未だ結論がでていないといえよう。ただし、人類の誕生をみてるならば、当初は皮膚呼吸に伴う触覚から機能しはじめていたであろうことは間違いなく、また生命維持のために最低限必要とされる食物嚥下、体温保持、生殖行為とともに触覚を刺激するものである。視覚の方は最後に完備される機能であるがゆえに、知的生命体つまり高度に発達した文節記号、言語を操れる生命体としての能力の完成に寄与している可能性がある。すなわち、触覚と視覚とは生命体としての人間が文化的存在となるための必要条件と充分条件とを満たす機能と捉えることができよう。

7 池上嘉彦 1975『意味論』大修館書店

「ある語の使われ方を他の語の使われ方と区別するのに必要な特徴を「示差的特徴」(distinctive feature)と呼ぶ。」(p 83)

「示差的」というのは言語的な概念である。それは純粹に言語の構造に基づいて規定されるものであり、それゆえ、たとえ同一の特徴であっても、ある言語では示差的、別の言語では非示差的ということもおこってくる。Saussure 以後、構造主義の立場に立つ人たちによって、「語の意味は他の語の意味との関連で決まる。」ということが言われてきたが、上のような意味にとれば、全く正しいといえる。」(p 86)

8 なお、本稿はこれらの統合型の統合意義特徴を探っていくにあたり、当初の規定を以下の拙稿の規定した内容であるものとして、分析を始めた。VA型とV得A型の統合意義特徴については、拙稿1995「述語補語統合型の統合意義特徴」『東京大学東洋文化研究所紀要』第128冊、pp 1-62の規定。A地V型の統合意義特徴については、拙稿1996「状語中心語統合型の統合意義特徴」『東京大学東洋文化研究所紀要』第129冊、pp 1-62の規定。

9 インフォーマントはともに北京育ち。女性は蔡暎軍(1956年生)、詹詠梅(1968年生)、男性は楊光(1968年生)。蔡、楊の両氏には注6で触れた大滝論文1995、1996の調査にも協力していただいた。また、詹氏の自省報告は一部、夫君である程峻(1961年生)氏と協議されたものである。

10 動詞の後置格が表層で動詞の前に置かれているときには、すでに「位置移動が表す文法的意義特徴」が加わっている、すなわち新手の統合意義特徴がいくつか加えられているみなせる。前置された名詞(主題部分)については次の2つが認められる。①格を表す名詞への特定意義特徴が付加される、②動詞との格関係を緩やかにし、第一次格ばかりか第二次格(道具)も共起できる。

11 動作の始まる時の状態を「平相」、動作がはじまり動作主や動作対象、道具などに変化が生じている状態を「流相」、動作がおわり新しく生じた安定した状態を「異相」と名付け、動詞の意義素の内部構造はそれぞれの相を意味的事項として各々に分属された語義的意義特徴によって組み立てられているものとする。文法的意義特徴には「格」や「アスペクト」「時空」など別の意味的事項をたてるものとする。

12 拙稿 1995 (注 8) において、すでに次の 2 つの統合意義特徴を設定した。

【VA 型統合意義特徴 I】(p 18) (本稿での NVA 了型に相当)

VA 型はつねに述語動詞が表す動作行為の行われる同じ時点で、設定されたなんらかのスケールを用いて、動詞が表す「出来事」を形容詞が判断・評価する。(状態形容詞が使えない以上、描写はしない)

【VA 型統合意義特徴 II】(p 20) (本稿での NVA 了型に相当)

VA 型は動詞の平相に存在する事物がそのまま異相まで存在した場合 (すなわち「動作主格」「動作対象格」として存在した場合)、動作行為を経て①平相と異相との状態を具体的に比較した判断結果、すなわち平相基準に基づいたが、②動詞の意義素が表示する「事柄」のうちで穏当な変化と認められた場合に「典型 VA」となる。そして③他の文法レベルにおける比較判断基準を文脈意義として付加する (または受け入れて共起する) ことができる。

本稿での付加・訂正した部分は次のとおりである。

①平相の段階の状態を VA 型内だけで用いられる「平相基準」と名付けた。

②「指示する」とあったのを、拙稿 1996 に基づいて「表示する」とした。

③「すべての判断基準」とあったのを、「すべての」を削除した。また、「文脈意義として」という注釈をつけ加えた。

なお、この拙稿 1995 における【VA 型統合意義特徴 II】では、「穏当な変化」の具体的特徴についてはふれていない。形容詞の種類によって、その語義的内容が異なることが予想されたからである。

例えば、数量的に増大する変化の方向性を備えた判断スケールをもち、かつ、その方向を「一定方向」と規定できるのは「数量化、時量化できるスケールを持つ量度形容詞」の、弁別的特徴であると考えられる。そして、量度形容詞における「穏当な変化」とは、判断スケールの変化の方向にそった量的増大であるといえる。

13 “鞋洗濕了”は「靴をはいて洗濯したら、その靴が濡れてしまった」という意味であり、“鞋洗了”は少し無理があるが「靴を洗った」という“受事主語句”(行為対象格を主語とする文)であると解釈されている。しかし、本稿のインフォーマン

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

トは全員この「鞋洗濕了」という用例については、意味を聞き返してきた後で、「使えるかも知れない」と答えている。彼らの語感では“鞋”は“刷”の対象であるためか、文脈意義に拠る背景の描写を必要とするようである。

- 14 現象素とは「意義素が表示すると想定された外界の状況」である。統合意義特徴を介して複数の意義素の現象素が結びついた、ひとまとまりの外界の状況のことを、本稿では「現象枠」と名付ける。「現象素」の概念は、国広哲弥 1994「認知的多義論—現象素の提唱—」『言語研究』106, p 22-44, に拠る。国広論文では「認知」と「現象素」という二つの概念を従来の「意義素」と次のように関連づけたいうえて、多義の構造を解析しようとしている。(注→は本稿での補充)

「認知とは知覚内容にある解釈を加えたもの」(注—知覚を客観の反映と考へ、認知を主観的なものとしている) p 23

「語が具体的場面で用いられるときは、場面・文脈によってさまざまに異なる意味を表面的に示すが、その異なり方のかなりの部分は場面条件、文脈の要素と連動しており、その限りにおいてその語自体の意味から取り除いて考えることができる。こうして得られた語自体の意味を我々は「意義素」と呼ぶ。(省略)しかしこの考え方は「あるひとつの語形には一つの意義素しかない」と主張しているのではない。そういう単義のことももちろんあるが、すでに述べてきたように、ある同一の現象に基づく認知的多義が認められるならば、(注—あるひとつの語形の)意義素はふたつ以上になり得る。この同一の現象のことを「現象素」と呼ぶことにしよう。これは単なる外界の一部というのではなく、人間の認知作用を通して、ひとまとまりをなすものとして把握された現象を指す。これは実質的には従来用いられてきた「指示物」(referent)に相当するものであるが、同じではない。指示物は言語とは関係のない外界の存在物と考えられていたのに対して、現象素は言語の用法から帰納された、言語と関連を持った外界の一部と捉えられるものである。」 p 25

- 15 褒貶形容詞は陸儉明 1990 (本文 p 151) や、崔永華 1982「褒貶形容詞相關の句法和詞義問題」《語言學論叢》第 9 輯, pp 96-121 で、次のようにリストアップされている。ただし、崔論文は VA 了型についての考察を主眼としていない。リストの中のアンダーラインは両者の意見の不一致 (注 16, 中性形容詞も含む) を表す。

陸 (A1 類の中を筆者の判断で褒義と貶義とに分けてリストアップした。)

褒義詞

均匀, 寬敞, 牢, 滿, 明白, 暖,

貶義詞

舊, 空, 枯, 苦, 累, 冷, 涼, 聾,

暖和, 平, 齊, 齊全, 清, 清楚,
全, 確實, 確切, 熱, 實, 舒服,
順, 透徹, 妥當, 旺, 穩, 香,
響, 興旺, 圓, 勻, 勻稱, 真,
准, 仔細, 足, 整齊, 快 (鋒利)
飽, 充分, 聰明, 對, 幹淨, 光,
好, 合理, 合適, 活, 活躍, 簡單,
結實

亂, 偏, 破, 窮, 弱, 散 sǎn, 濕,
碎, 疼, 燙, 痛, 彎, 斜, 野, 雜,
臟, 糟, 腫, 皺, 醉, 爛 (腐敗),
笨, 慘, 幹, 錯, 鬍塗, 壞,
僵

崔:褒義形容詞

乖, 好, 靈, 香, (這人真) 行,
准, 安全, 聰明, 方便, 幹淨,
高興, 公平, 好看, 合適, 厚道,
機靈, 積極, 健康, 結實, 寬綽,
利索, 涼快, 靈活, 能幹, 暖和,
漂亮, 勤快, 舒服, 順利, 痛快,
幸福, 整齊, 正常, 正派, 周到,
自然

貶義形容詞

笨, 醜, 臭, 叨, 餓, 貴, 慌, 壞,
懶, 聾, 亂, 慢, 難, 破, 晚,
悲觀, 被動, 別扭, 薄弱, 刺耳,
粗魯, 粗心, 幹巴, 固執, 鬍塗,
急躁, 嬌氣, 可惜, 困難, 羅唆,
落後, 冒失, 難受, 危險, 消極,
小氣, 冤枉, 自私, 做作,
好笑

- 16 陸論文と崔論文は A2 類, 中性形容詞に属する形容詞を次のようにリストアップしている。

陸:矮, 暗, 白, 薄, 扁, 長, 遲, 稠, 粗, 大, 淡, 低, 短, 多, 高, 貴, 黑, 紅,
厚, 黄, 尖, 賤, 焦, 緊, 近, 久, 快 (速度), 寬, 辣, 藍, 爛 (煮~了), 亮,
綠, 慢, 密, 胖, 便宜, 淺, 輕, 少, 深, 瘦, 松, 酸, 甜, 晚, 稀, 細, 鹹, 小,
嚴, 遠, 早, 窄, 重, 肥, 硬

崔:白, 紅, 長, 短, 粗, 細, 大, 小, 鹹, 淡, 甜, 酸, 多, 少, 深, 淺, 松, 緊,
涼, 熱, 輕, 重, 軟, 硬, 高, 快, 激烈, 尖銳, 簡單, 講究, 緊張, 年輕, 一般
本稿が扱う 4 対の判断形容詞は, 陸 1989 (注 1) の量度形容詞であり, またこの
A2 類の形容詞でもある。

- 17 陸俊明 1990 では, 他の統合型との関連付けを次のように解釈している。

「VA 了」は(a)ある結果が実現する(b)ある予期した結果から外れている, の 2
通りの意味をあらわすことができる。

(a)の意味を表す「VA 了」と(b)の意味を表す「VA 了」とでは, 内部構造が次の
ように異なっている。

例 (a) 凉 乾 了 (b) 凉 乾 了

判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析

- 18 李臨定 1990《現代漢語動詞》中國社會科學出版社, p 107

動詞“糊”が2つの格“受事賓語”(行為対象)、“工具賓語”(道具)のどちらかをとれる動詞グループ「糊, 頂, 澆, 捆」に属することを指摘している。

- 19 「詳述」については、拙稿 1996 p17 で次のように規定した。

第二次格としては動詞・形容詞ともに介詞構造だけによって表現される意義特徴のグループが存在している。しかし第二次格のほうは、単語の意義素の中の欠損部分として、他の形式によって表されることが要求されているものではない。文を叙述するにあたって、第一人称者によって「何かをより具体的にかつ個別的に詳述するため」(「詳述」は本稿独自の用語)に述べられるものである。

本稿では、「何か」を「状況」と捉えなおす。状況には①「背景, 現景, 前景」の区別がある。②叙述時点と叙述地点が含まれている。

また「詳述」の形式として、①介詞構造②連体修飾構造のうちの「外なる関係」(寺村秀夫 1975「連体修飾のシンタクスと意味——その1」『日本語・日本文化』4号大阪外国語大学)③従来の連用修飾構造のうち「時空, 程度, 様態, 情意」に関する形式を含むものとする。

なお従来、「接続, 評価, 陳述, 感動」等呼ばれてきた副詞(的表現)が表す叙述の営みは、詳述とは異なる類のもの、即ち状況内部を叙述しない類のものとして捉えることにする。